

千葉県八千代市

米本城跡 c 地点

- 共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -

2023

加茂 文雄

八千代市教育委員会



中国産青磁折縁盤・白磁碗

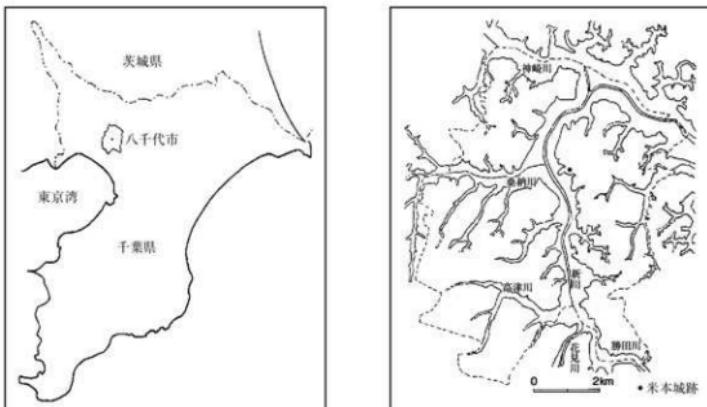


調査区全景(南西から)

千葉県八千代市

米本城跡 c 地点

- 共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -



2023

加茂 文雄

八千代市教育委員会

中世土器・陶磁器索引 *例えば48-1(22)は第48図1で22ページとして表記

土器

- カワラケ 16-13P1(17).21-15P1(21).22-88P1(22).26-61P1(25).26-62P1(25)
26-71P1(25).26-73P1(25).29-24P1(27).29-54P1(27).31-1.2.4(29).32-1(30)
- 内耳土鍋 14-1 ~ 4(15).21-01井1 ~ 4(21).22-83P1.2(22).22-84P1.2.4 ~ 6(22)
22-85P1(22).22-87P1(22).22-88P2(22).23-93P1(23).23-103P1(23)
26-56P1(25).26-67P1 ~ 3(25).29-44P1(27).29-50P1(27).29-54P2.3(27)
31-5 ~ 9(29).32-2(30).33-2.5(31).33-下段2.3(31)
- 擂鉢 14-5 ~ 7(15).21-01井5(21).22-84P3.7(22).22-85P2.3(22).29-50P2(27)
31-10.11(29).33-3.4(31).33-下段1(31)
- 壺 23-92P1(23)
- 火鉢 33-6(31).34-5(32)
- 土製釜 34-4(32)

瀬戸美濃産

- 平碗 16-土上2(17).22-84P8(22)
- 縁輪小皿 31-14(29)
- 縁輪挟み皿 15-8(16).26-65P1(25).33-8(31)
- 卸目付大皿 21-01井6(21)
- 擂鉢 14-10(15).15-11(16).16-2T1(17).16-土上3(17).22-83P3(22).22-84P10(22)
26-56P2(25).29-49P1(27).33-7(31).34-6.8 ~ 10(32)
- 茶壺 22-84P9(22)
- 茶入 31-16(29)
- 端反皿 31-12.13(29).33-9(31)
- 丸皿 31-15(29)
- 練鉢 34-7(32) *1点のみ近世

常滑産

- 甕 15-12(16).16-土上4(17).21-01井7.9(21)
- 片口鉢 21-01井8(21).21-15P2(21).31-17.18(29).34-11(32)

中国産

- 青磁緑折皿(盤) 23-90P1(23)
- 白磁端反皿 26-76P1(25)

凡　例

- 1 本書は、八千代市米本字内宿南1732-1の一部他に所在する米本城跡c地点の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、確認調査を国庫・県費補助事業として、本調査は、民間開発等埋蔵文化財調査事業として、事業者より調査協力金を納付いただき、八千代市教育委員会の委託事業として実施した。
- 3 発掘調査・本整理作業は以下のとおりである。

[調査] 確認調査　期間 令和4年3月3日～15日 面積190.5m² / 2,048.19m² 担当 森
　　本調査　期間 令和4年6月13日～8月10日 面積865m² 担当 森 竜哉
　　調査補助員 板橋三郎・溝板雄志・品川信昭・柴田清加・鈴木一代・高木秀夫
　　萩原雄一・長谷川恵理子・原田雪子・藤田千博・室中勝典

[整理] 図版作成　期間 令和4年9月5日～12月27日 担当 森
　　整理補助員 柴田清加・長谷川恵理子
　　文化財整理員 岩崎千代子・宇都洋子・杵島由希

- 4 本書の編集・執筆は、第3章を除き森がおこなった。
- 5 現場の遺構写真及び報告書掲載の遺物写真は森が撮影した。
- 6 本書の作成・刊行については、整理補助員、文化財整理員と森が協力して行い、森が統括した。
- 7 出土遺物、実測図等の資料は、八千代市教育委員会が保管している。
- 8 本書の遺構番号は、発掘調査時の番号を使用している。
- 9 遺構・遺物の縮尺は、以下のとおりとした。測量図・全測図等については別記とした。

[遺構] 適宜とし、図中に記載した。

[遺物] 土器・陶磁器1/3 石製品・金属製品等1/3 銭貨・鍼原寸

- 10 遺物実測図の中軸線サイドの空きは、復元実測を示す。
- 11 遺構遺物のスクリーントーンは、その都度説明を加えた。
- 12 出土した中世遺物について、元船橋市教育委員会 道上文氏にご教示を賜わるとともに第3章まとめ「本跡出土の中世遺物と調査地点の性格について」の原稿を執筆いただいた。
- 13 米本城跡全般について、千葉市立郷土博物館 外山信司氏・遠山成一氏にご教示を賜わった。
- 14 本書使用の地形図等は下記のとおりである。
　　第1図 国土地理院発行 1/50,000佐倉に加筆
　　第2図 『八千代市中世館城址調査報告』1978
　　第3図 八千代市発行 1/2,500八千代都市計画基本図
- 15 発掘調査から報告書刊行に至るまで、下記の諸氏・機関にご指導、ご協力をいただいた。(敬称略)加茂文雄 大東建託株式会社 千葉県教育庁文化財課

本文目次

第1章 序説

　　第1節 調査に至る経緯 1 第2節 調査の方法と経過 1

第2章 検出された遺構と遺物

　　第1節 確認調査概要 11 第5節 中央遺構群と出土遺物 24

　　第2節 掘込型屋敷、01土塁、09～13P、04M 11 第6節 南側遺構群と出土遺物 25

　　第3節 02調査区遺構概要 17 第7節 整地面出土遺物 27

　　第4節 北側遺構群と出土遺物 18 第8節 排土・確認調査時出土遺物 28

第3章 まとめ

　　本跡出土の中世遺物と調査地点の性格について 33

参考文献・報告書抄録

挿図目次

第1図	周辺の遺跡	1	第18図	02調査区北側遺構群配置図	19
第2図	米本城跡測量図	2	第19図	01井戸遺構実測図	20
第3図	調査地点	3	第20図	14P土層断面図	20
第4図	確認調査遺構確認状況図	4	第21図	北側遺構群出土遺物(1)	21
第5図	調査地点測量図	5	第22図	北側遺構群出土遺物(2)	22
第6図	調査地点遺構配置測量図	9	第23図	北側遺構群出土遺物(3)	23
第7図	遺構配置図	10	第24図	02調査区中央遺構群配置図	24
第8図	基本層序図	11	第25図	62P・63P土層断面図	24
第9図	トレンチ・調査区配置図	12	第26図	中央遺構群出土遺物	25
第10図	土壘部分地形測量図	13	第27図	02調査区南側遺構群配置図	26
第11図	01土壘等遺構配置図	13	第28図	54P遺構実測図	26
第12図	01土壘土層断面図	14	第29図	南側遺構群出土遺物	27
第13図	09P土層断面図	15	第30図	整地面No遺物分布図	28
第14図	01土壘出土遺物(1)	15	第31図	整地面No出土遺物	29
第15図	01土壘出土遺物(2)	16	第32図	整地面一括出土遺物	30
第16図	土壘等出土遺物	17	第33図	排土・確認調査時(1)出土遺物	31
第17図	02調査区遺構配置図	18	第34図	確認調査時(2)出土遺物	32

表1	米本城跡c地点 遺物別分類表	36
表2	米本城跡c地点 その他の中世遺物分類表	36
表3	米本城跡b地点 遺物別分類表	36
表4	米本城跡c地点 中世遺物の内訳	36
表5	米本城跡b地点 中世遺物の内訳	36
表6	米本城跡c地点 潬戸・美濃窯製品時期別変化	37
表7	米本城跡b地点 潬戸・美濃窯製品時期別変化(登窯含む)	37
グラフ1	米本城跡c地点 潬戸・美濃窯製品時期別変化	37
グラフ2	米本城跡b地点 潬戸・美濃窯製品時期別変化	37
グラフ3	米本城跡c地点と他の遺跡の遺物組成比較	38
表8	他の遺跡と米本城跡c地点の遺物組成比較(中世一部は17c前半含む)	38

図版目次

卷頭図版	中国産青磁折縁盤・白磁碗 調査区全景(南西から)	
図版1 遺構	[土壘, 1T ~ 3T 調査]	
図版2 遺構	[1T ~ 3T 調査, 0.4M]	
図版3 遺構	[基本層序, 14P, 01井戸]	
図版4 遺構	[調査区全景, 54P, 83P, 84P]	
図版5 遺物	[土壘, 土壘上]	
図版6 遺物	[2T, 13P, 15P, 24P, 49P, 50P, 56P, 57P, 62P, 65P, 67P, 73P, 76P, 92P, 93P]	
図版7 遺物	[88P, 90P, 103P, 54P, 83P]	
図版8 遺物	[84P, 61P, 87P, 01井戸]	
図版9 遺物	[整地面No遺物, 整地面一括]	
図版10 遺物	[確認調査, 排土]	

第1章 序 説

第1節 調査に至る経緯

令和3年12月、加茂 文雄 氏(以下事業者という)から、共同住宅建設を予定する旨で「埋蔵文化財の取扱いについて(確認)」の文書が八千代市教育委員会に提出された。確認地は、市道跡No.117米本城跡の範囲内であり、予定地内に土塁が確認されることから、文化財保護法第93条の届出が必要な旨回答した。届出を受けて、協議の結果、確認調査を実施することとなり、伐採等準備が整った令和4年3月に確認調査を実施した。その結果、中世土塁1条・同土坑11基・同掘立柱建物跡2棟等が検出され、その後の協議により記録保存の措置をとることとなり、委託契約書の締結等諸準備が整った令和4年6月本調査に着手した。

第2節 調査の方法と経過

調査期間は令和4年6月13日～同年8月10日で、6月13日～17日土塁部分トレーンチ設定後断ち切り、1～3トレーンチ実測・遺物取り上げ、6月20日～24日重機により01.02調査区の表土剥ぎ、6月28日～7月11日3トレーンチ拡張区・土塁南側部分遺構調査、7月12日～15日02調査区遺構プラン確定作業に移行。遺物取り上げを行いつつ、確認面確定のため重機による掘り下げを実施する。7月19日～26日遺構プラン確定作業・01井戸掘り下げ・ピット半截を行う。7月28日～8月4日ピット全掘・実測図作成、8月5日ドローンによる全景写真撮影を実施。8月6日～10日重機による埋め戻し、機材撤収を行い調査を完了とした。



第1図 周辺の遺跡

(S=1:50,000)

1. 米本城跡

四郭の直線式郭、南北500m×東西150mの規模。城域に根古屋・りゅうきや等の地名や井戸・櫻窓・虎口等の施設を有する。これまでに、a-b地点の調査を実施。b地点において、堀跡から近景にかけての屋敷地としての土地利用が解明された。

2. 米本城田遺跡

令和3年度に確認調査を実施し、遺構では中世土坑13基・溝3条、遺物では15世紀後半～16世紀の内耳土鍋等が出土した。

3. 七百石所神社古墳

令和2年度に歩路整備の目的で古墳の確認調査実施時に、内耳土鍋・風呂を表す。揭示している。

4. 正覺院跡

鎌倉時代後期の清浄寺式伽藍如来立像が安置される。「八千代市の歴史」通史編上のP264～P276に転造如来・寺域内発見品の詳記、P376～P384に発掘による成果の詳記が掲載される。鉢跡は、二郭からなる防御部分とその東側に一段低い船型想定部分から構成。南北120m×東西120mの方形形状の平面をもつ。

これまでの調査成績から、13世紀～16世紀に機能したと想定される。

5. 深間内遺跡

八千代市辻田前山地区画整理事業に伴う発掘調査において、中世については遺構ではT字型土塁2基、地下式竈(堅井)2基・V字断面の2基、遺物ではカワラケ・漏斗形土器・縦縫鉢等の土器類・漆器・瓦(赤焼き)・瀬戸灰陶・撻鉢・扇皿・天目茶碗・香炉等で、撻鉢は大室期～登壇期に想定される。この他白釉・板磚・瓦等が出土した。出土品は近世においても継続し、肥前系・堺系等の陶器が見られる。

6. 斎廟皆傳跡

伝承として跡跡とされるが、城内発掘調査(八千代市文化伝承館建設件)において中世関連の遺構・遺物は確認されていない。

7. 井戸向遺跡

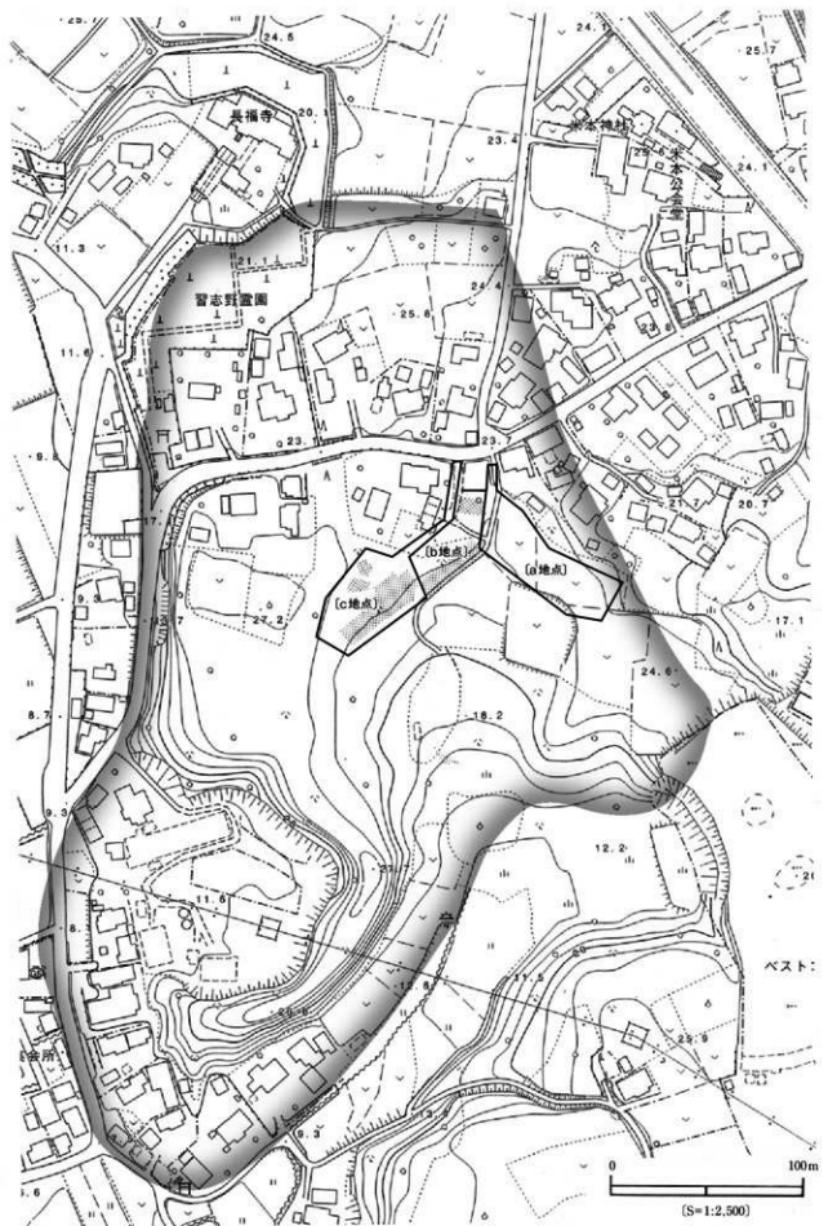
荒町特定土地区画整理事業に先行した発掘調査において、中世については本遺跡のみで検出されており、遺跡北東側に集中して見られる。遺構では12世紀後半の幕坑2基以上、15～16世紀の地下式坑2基・找油埋納土坑等、遺物は幕坑から和鏡・青磁碗・削刀、15世紀後半～16世紀初期を中核とした瀬戸磁碗・平碗・撻鉢・綠釉小皿・天目茶碗・中國青磁碗皿・土器では内耳土瓶・土器鋸鉢・カワラケ・瓦質火鉢等が出土した。

8. 白幡前遺跡

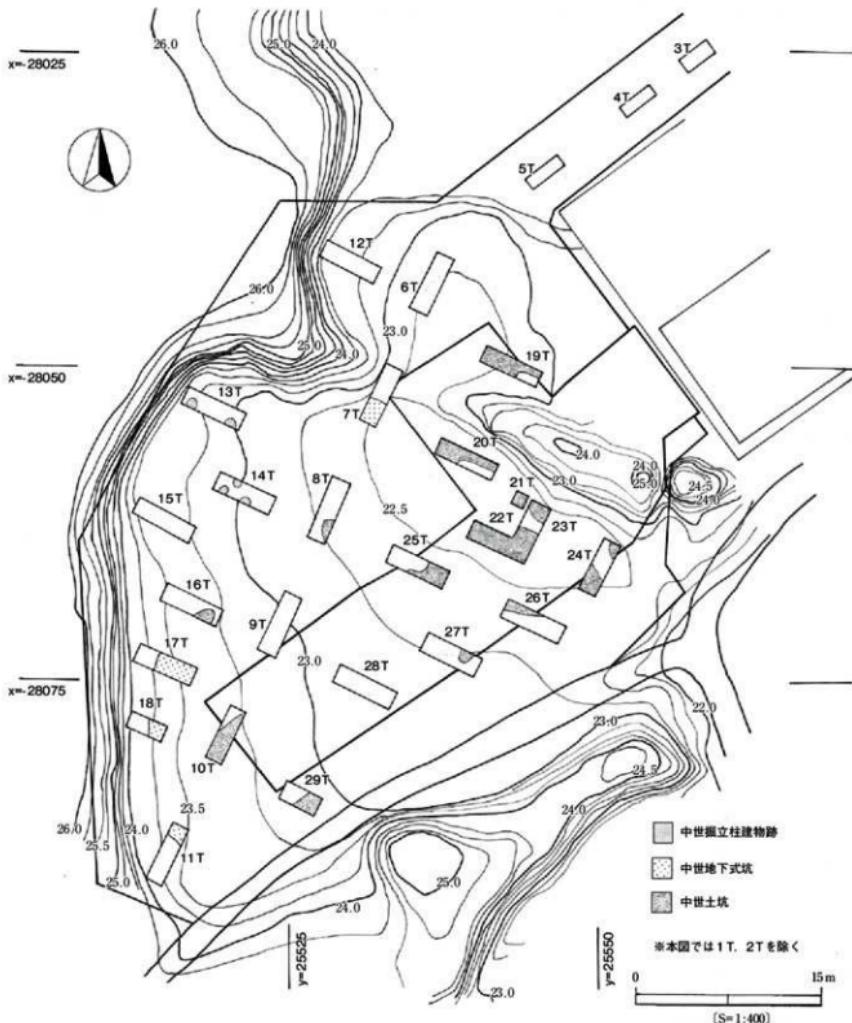
福祉施設建設に伴う発掘調査において、中世の遺構・遺物が発見された。遺構は台地整地区分1番・ピット2基・溝路12条・掘立柱建物跡1棟・ピット214基等が、遺物は中世では中国青磁無文直口碗・青磁縫縫花瓶・青磁枝花瓶・土器では内耳土瓶・土器鋸鉢・カワラケ・源氏寺焼内耳土瓶・瀬戸灰陶・縫縫小皿・天目茶碗・美濃青磁・志野丸皿・16世紀後半～17世紀前半を中心とする。近世では瀬戸筒形香炉片・美濃鋸鉢等で18～19世紀初頭を中心とする。土器ではカワラケ(透明皿)で17～18世紀前半に位置づけられている。その他板磚・漆瓶が出土した。これらの遺構・遺物から、15世紀中葉～16世紀に亘る地域有力者の居住域としての空間利用が想定されている。



第2図 米本城跡測量図



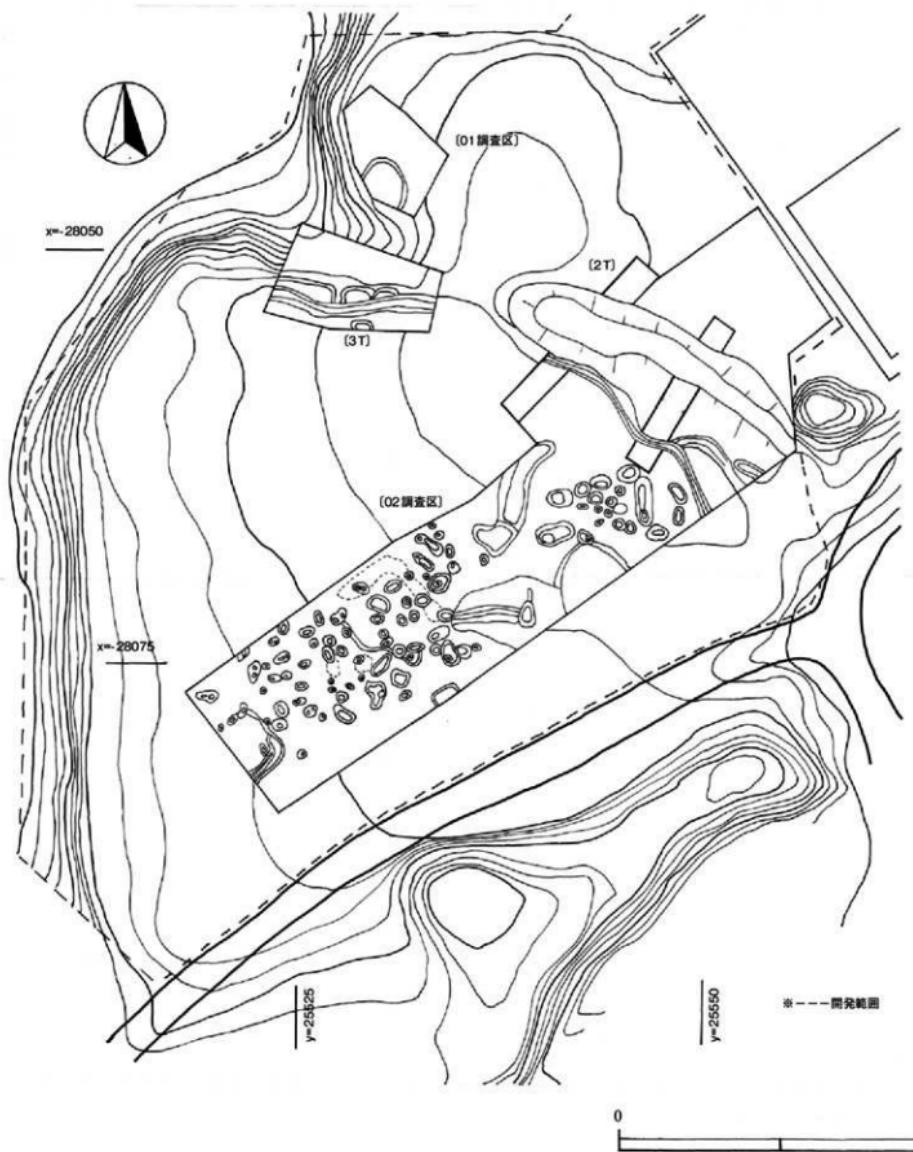
第3図 調査地点



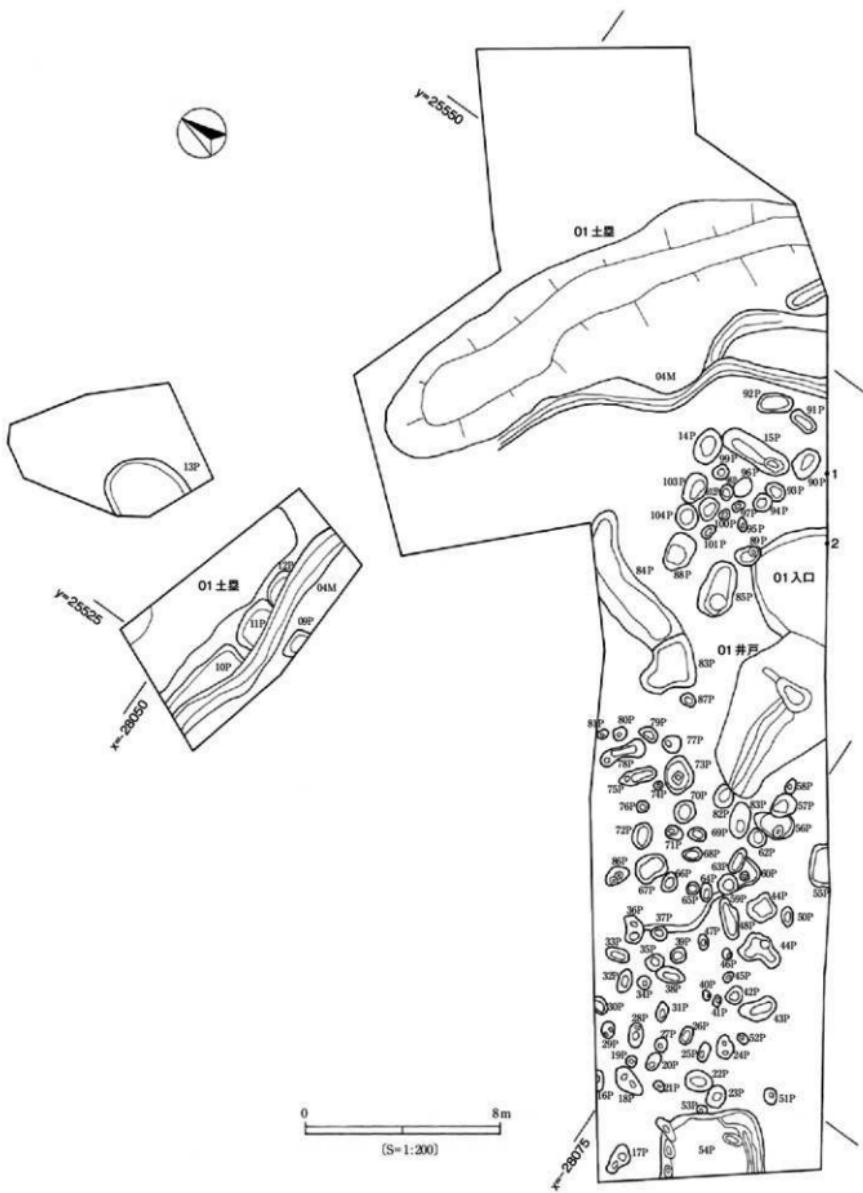
第4図 確認調査遺構確認状況図



第5図 調査地点測量図



第6図 調査地点遺構配置測量図



第7図 造構配置図

第2章 検出された遺構と遺物

第1節 確認調査概要(第4図・34図)

今回実施したc地点においては、確認調査範囲が本調査範囲・保存区域に分けられるため概要を示した。確認調査面積は2,048m²である。遺構は、中世掘立柱建物跡2棟・土坑11基・地下式坑4基・土塁1条を確認し、遺物は土製釜・火鉢・内耳土鍋・土器擂鉢・瀬戸擂鉢・常滑片口鉢等が出土した。遺構では、保存区域の西側部分に地下式坑を確認している。本調査範囲では、明確な地下式坑は検出されなかった。遺物では、本調査時と同様な時期の土器類のほか、土鍤等の生業に関わる出土品が見られる。

第2節 掘込型屋敷、01土塁、09～13P、04M(第10、11、12図・図版1.2)

掘込型屋敷

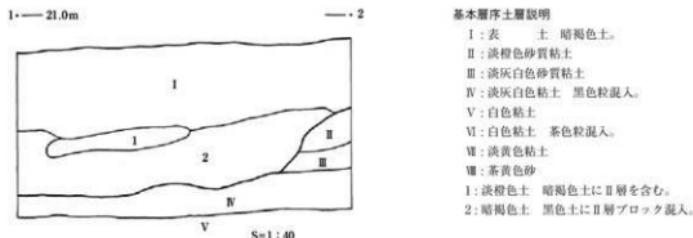
01土塁は、北側のb地点では南北方向でc地点北側では東西方向となり、西側台地突出部に至る。現在土塁と西側突出部間に開口部があるが、本来は繋がっていた。第5図に示すように西突出部から南北方向にかけて人为的に2.0～3.0m掘削して窪地状となしている。更に南東側に土塁状の高まりを有する。結果として北側40m×西側50m×東側40mで南側と北東側に開口部を持つ区画となり、掘込型屋敷地を形成している。

01土塁

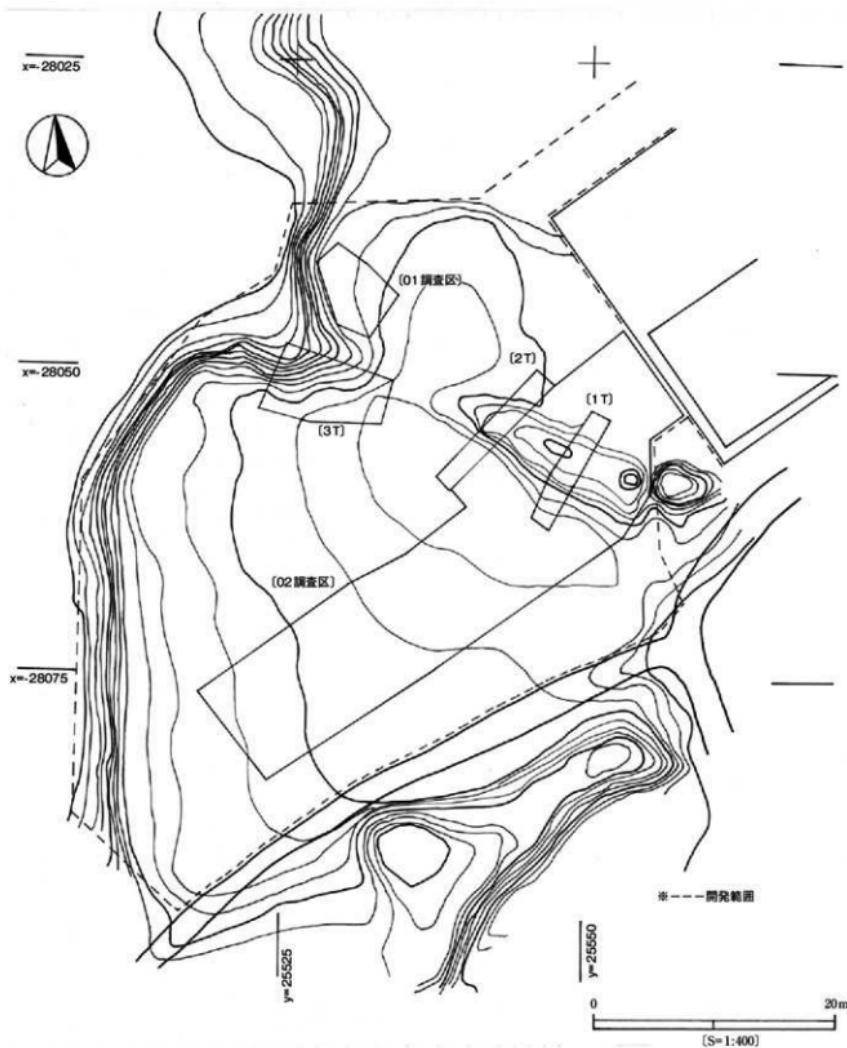
本調査区の土塁について言及する。全長33.0m・幅7.0m、標高は24.5～25.0mの規模をもつ。各トレンチについて説明を加える。各トレンチとも基盤となる土台層はハードローム層で、1Tでは、その上部にローム+ロームブロック層を0.4m積み上げる。土塁内側では下方に傾斜面を作り土塁頂部から1.6mの高低差で平坦面と成っている。下位で04Mが切る。2Tでは、土台上に1～4の積み上げ層があり、1Tより角度をつけて土塁頂部から2.2mの高低差で、土塁内側の平坦面に至る。下位で04Mに切られる。3Tでは、意識してハードローム土台を突出状に削り残している。ハードロームの土台は、下方に傾斜をもって内側に至りコの字状の掘り込み(10P～12P)が存する。ここでも下位で04Mに切られる。遺物は、土塁土台部・04M覆土中で、15世紀後半～16世紀前半の時間幅が見られる。

09～13P

各ピットのデータは15Pに掲げた。09Pは単独の方形土坑である。10～12Pは突出部南側に隣接した位置にある。04Mに切られており、規模は一部のみで方形及び長方形の平面形が想定される。並列しており、突出部内側に付随した施設と考えられる。13Pは突出部北側に単独で検出された。覆土に焼土粒を含んでおり、カワラケが1点出土した。性格は不明である。



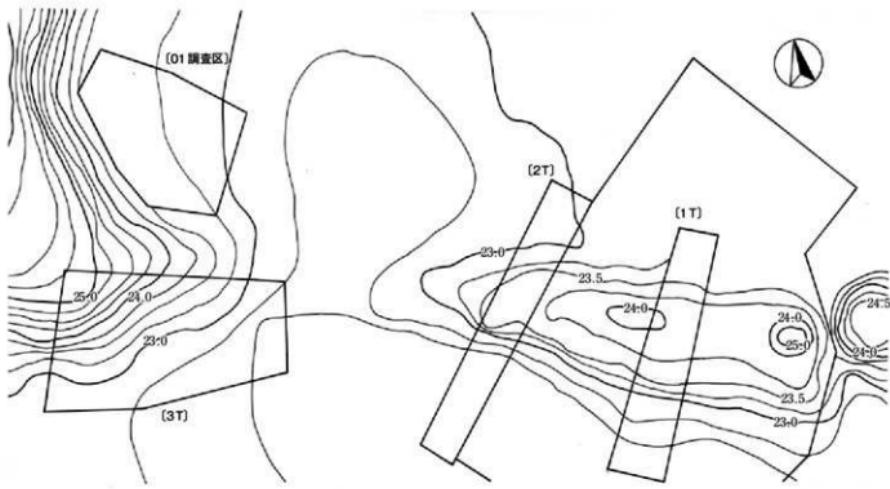
第8図 基本層序図



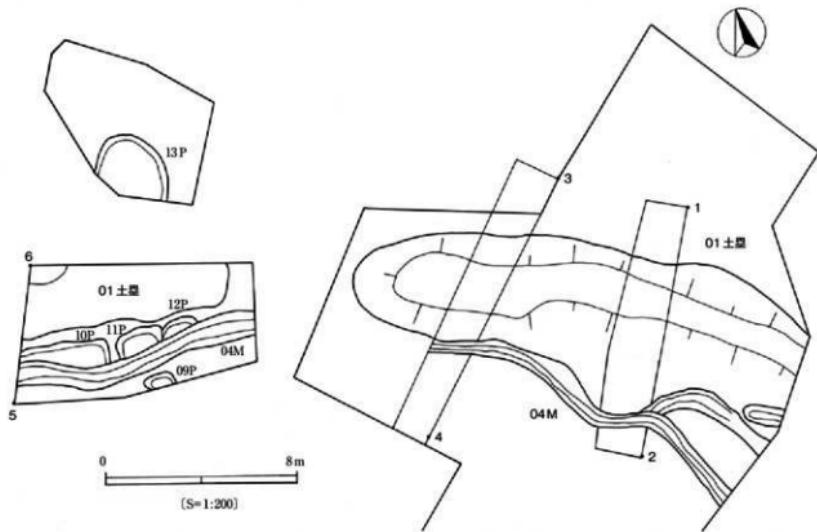
第9図 トレンチ・調査区配置図

04M

西突出部南側から東西方向に土壌に並走した溝である。長さ30m×幅1.4m×深0.3mで、東側で一部土壌を切る。西側部分では近世以降の陶磁器片が出土している。1Tでは土壌張り出し部に沿うように掘り込まれていた。



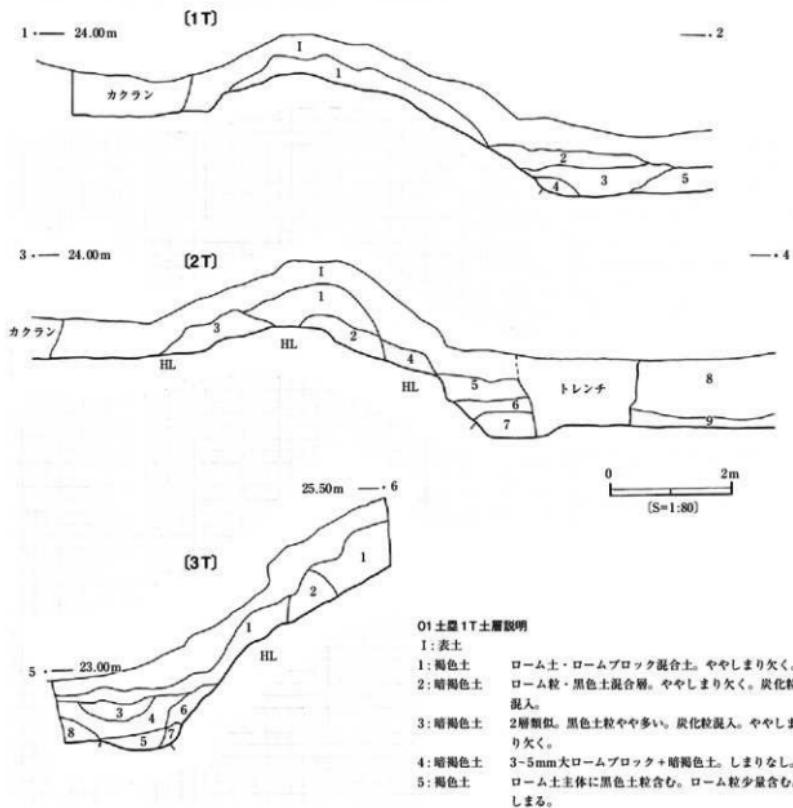
第10図 土壘部分地形測量図



第11図 01土壘等遺構配置図

基本層序(第8図)

遺構確認面は、II～IV層上面を基本とし、各遺構の底面はV層より上位となる。01井戸のみV層以下の埴層を坑底とする。詳細は17^o [第3節02調査区] 項・28^o [第7節整地面と出土遺物] 項参照



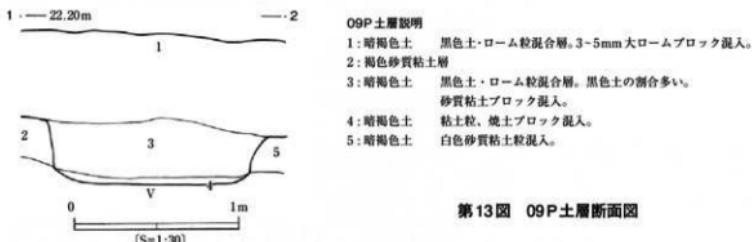
01 土壌 2T 土層説明

- I: 表土
- 1: 黄褐色土 ロームブロック・ローム粒混合。しまりなし。ほそぼそ。
- 2: 黄褐色土 1層頗似。ややしまりあり。
- 3: 黄褐色土 ローム主体。ややしまりあり。
- 4: 黄褐色土 1層頗似。ローム土や多い。
- 5: 黄褐色土 黒色土・ローム粒混合層。燒土粒・炭化粒含む。しまりやや弱い。
- 6: 黄褐色土 5層頗似。黒色土粒や多い。
- 7: 黄褐色土 5層頗似。しまりやや強い。粘土粒少量含む。
- 8: 黄褐色土 7層頗似。白色粘土粒や多い。
- 9: 黄褐色土 ローム土主体。黒色土粒・粘土粒含む。しまる。

01 土壌 3T 西側土層説明

- I: 表土
- 1: 黄褐色土 ロームブロック細砂土。
- 2: 黑褐色土 ロームブロック混入。
- 3: 黄褐色土 黒色土・ローム粒混合土。3mm大~2cm大ロームブロック混入。
- 4: 黄褐色土 3層頗似。黑色土の混入少ない。
- 5: 黄褐色土 3層頗似。ロームブロックの混入や少ない。
- 6: 黄褐色土 黒色土・ローム粒含む。3mm大ロームブロック混入。
- 7: 黄褐色土 6層頗似。ロームブロック混入や多い。
- 8: 黄褐色土 1cm大ロームブロック。黒色土・ローム粒混合土。

第12図 01 土壌土層断面図



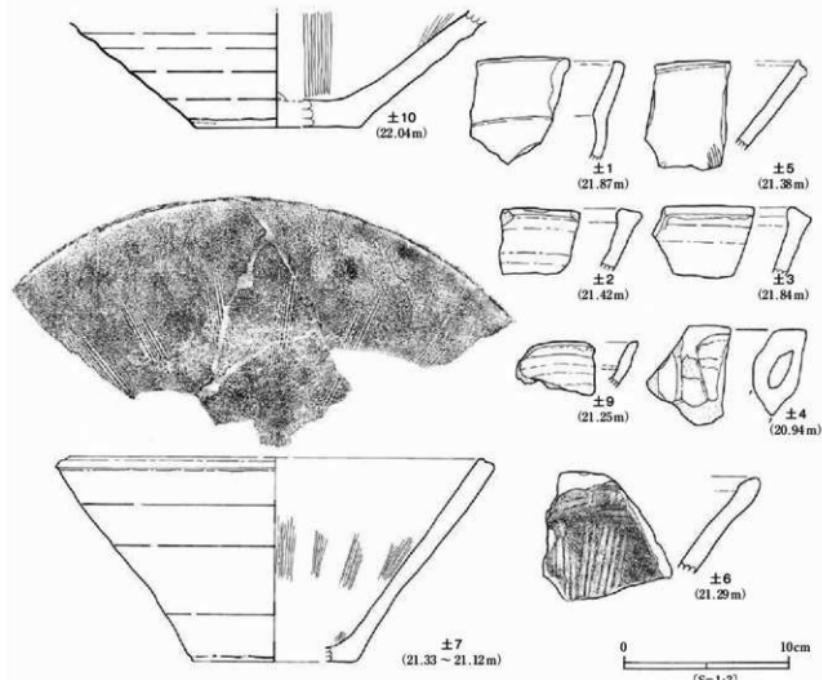
第13図 09P 土層断面図

3T 遺構群遺構計測表 *黒は黒色土、ローム粒はロ粘、ロームブロックはロブとする

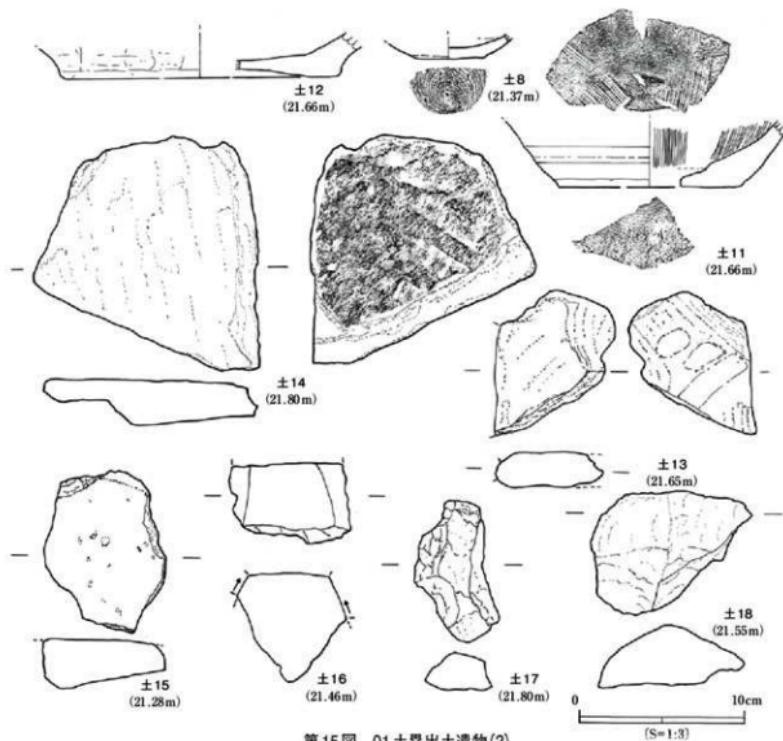
遺構番号	区割り	平面形態	主輪	断面形	長軸×短軸×深さ(m)	縦断面	主な覆土	参考
09P	3T 調査区	長方形	N4°-W	楕円	1.28 × 0.37 以下 × 0.04	I 層上面	暗褐色土(黒・ロ粘・ロブ含)	
10P	3T 調査区	長方形	N4°-E	楕円	3.7 × 1.18 以上 × 0.42	II 層上面	褐色土	
11P	3T 調査区	長方形	N4°-W	楕円	2.04 × 0.9 以上 × 0.44	II 層上面	褐色土	
12P	3T 調査区	橢円形	N4°-W	楕円	1.5 × 0.6 以上 × 0.32	II 層上面	褐色土	

01 調査区遺構計測表 *黒は黒色土、ローム粒はロ粘、ロームブロックはロブとする

遺構番号	区割り	平面形態	主輪	断面形	長軸×短軸×深さ(m)	縦断面	主な覆土	参考
13P	01 調査区	半平方形	N38°-E	浅い箱形	3.2 以上 × 25 × 0.25	II 層上面	暗褐色土	下層よりカワラ片



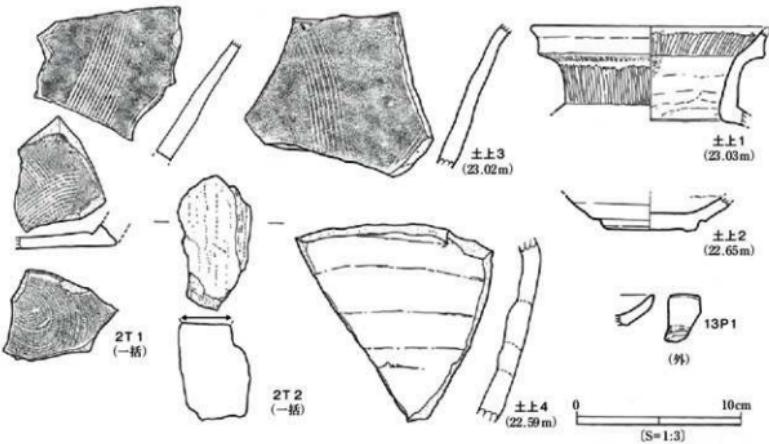
第14図 01 土壙出土遺物(1)



第15図 01土壌出土遺物(2)

01 土壌遺物観察表

番号	器種	器形	部位	計測値(cm)			焼成	色調	施土	調整・文様等
				高さ	口徑	底径				
1	土器	内耳土器	口縁部片	-	-	-	真	内外暗褐色	墨目 石灰	《すべて燒成。内側クロナデ。13層内面下方に横に溝。》
2	土器	内耳土器	口縁部片	-	-	-	真	内外茶褐色	墨目 多合。	内側クロナデ。
3	土器	内耳土器	口縁部片	-	-	-	真	外系茶褐色	墨目、石灰	墨目、砂粒。
4	土器	内耳土器	13層内面部分	-	-	-	真	外系茶褐色	墨目、石灰多含。	墨化焼成。内外クロナデ。
5	土器	土器縁跡	口縁部片	-	-	-	真	内外暗褐色	墨目、石灰。	《すべて焼成。内側クロナデ。》
6	土器	土器縁跡	口縁部片	-	-	-	真	内外黒灰色	石灰、墨目	墨化焼成。内側ナラ調整。幅目は5本。幅4mmと広い。外側無墨目。
7	土器	土器縁跡	13層～底部1/3	12.3	27.0	10.0	真	内外淡茶褐色	墨目、石英	瓦質、底面火炎紋。輪施みクロロ調整。内側ナラ。調査時、13層底部1枚。墨目は8mmと10mm。15世紀。
8	鏡	縫接扶み紐	底部1/2	15	-	4.0	真	内外淡茶褐色	墨目	内側クロロナデ。古鏡口後折断新。15後半。
9	鏡	縫接小口	11層1/8	-	-	-	真	内外淡茶褐色	やや褪い	内側クロロナデ。
10	鏡	縫接	底部～鏡脚下半1/4	7.0	-	10.0	真	内外暗茶褐色	石英、石灰	クロロ調整。内側クロロナデ。外側クロロ目判期。墨目9本。大正初期。16世紀。
11	鏡	縫接	底部～鏡脚下半	-	-	-	真	内外茶褐色	ち密	クロロ調整。内側クロロナデ。内面19本墨の部分。底部右側に墨目有り。上部墨が剥がれ。16世紀。
12	常滑	要	底部1/4	7.0	-	17.0	真	内外茶褐色	石灰、石英	輪施みクロロ調整。全体右端ヘリナデ。内ナデ。16世紀。
13	石製品	磨石か		幅長9.0	横長7.2	厚さ 2.0	重さ 162kg	緑泥片岩	輪施みクロロ品。左側面に切削痕の磨き痕が見られる。表面に板状剥離時のノミ痕が3カ所見られる。	
14	石製品	板脚片		幅長14.1	横長13.6	厚さ 2.6	重さ 230kg	緑泥片岩	武藏風。表面にノミ痕3カ所見れる。	
15	石製品	石臼ないし磨石	6	幅長9.7	横長7.4	厚さ 3.0	重さ 262kg	輝石安山岩か	上部において平面。やや磨られた痕跡あり。	
16	石製品	磨石	破片	幅長7.4	横長7.0	厚さ 6.5	重さ 262kg	安山岩か	磨らせる面上は火炎面。上層、西側面の4箇所である。	
17	石製品	石磨一部か	破片	幅長8.7	横長5.0	厚さ 2.4	重さ 93kg	安山岩か	石場の一部と想定されるが部位不明。	
18	石製品	石磨一部か	破片	幅長7.2	横長5.5	厚さ 3.6	重さ 257kg	安山岩か	石場の一部で、五輪塔地輪か。	
19	アカニシ貝			-	-	-	-	-	-	美濃せず。
20	アカニシ貝			-	-	-	-	-	-	美濃せず。



第16図 土上等出土遺物

01 土上等出土遺物観察表

器種	器形	部位	計測値(cm)			地成	色調	胎土	調整・文様等
			高さ	口径	底径				
1 土鍋器	壺	口縁一箇部 1/4	復原高57	復原口径14.5	-	- 良	内外赤褐色 (赤彩有)	長石、雲母	古墳時代前期。口外唇部ナデ。腹部堅似ハラ唇。
2 壺	瓦輪平柄	底部 1/2	-	-	-	- 良	内淡黄色 内淡灰白色(施釉)	石英、ち密	クロロ調整。底部削り出し高台。内面施釉。
3 壺	壺	側溝	側溝片	-	-	- 良	内外淡灰褐色(施釉)	長石、ち密	クロロ調整。縦目8本。16世紀。
4 常滑	壺	側溝片	-	-	-	- 良	内外茶色内淡灰白色	石英、ち密	輪積みクロロ調整。15~16世紀。

土壘 2 レンジ等出土遺物観察表

器種	器形	部位	計測値(cm)			地成	色調	胎土	調整・文様等
			高さ	口径	底径				
1 壺	壺	底部 -側溝	-	-	-	- 内外暗紫色 (錆味)	ち密	底部右側斜面切り離し。縦目13本。	底部内の墨目十文字。大空期 16世紀。
2 石製品	石・石片	側溝片	幅長8.2	横長4.5	厚さ3.8	厚さ2.8	青母片岩	平頭面で磨られる。	

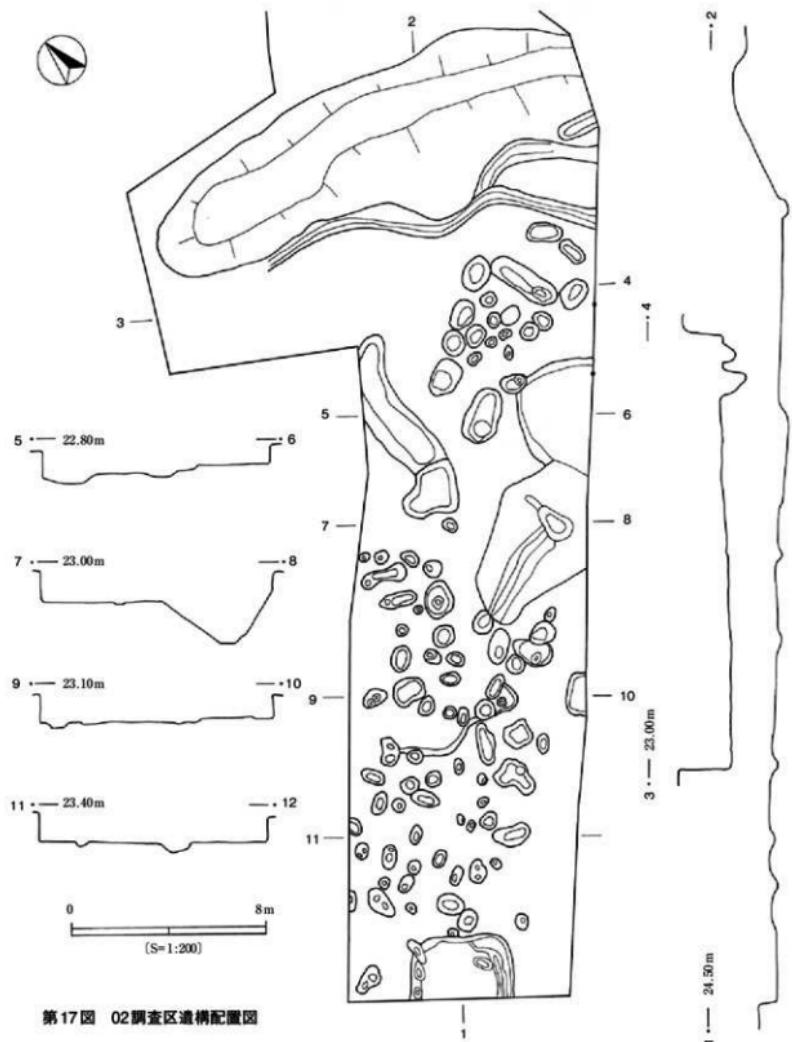
13P 1 出土遺物観察表

器種	器形	部位	計測値(cm)			地成	色調	胎土	調整・文様等
			高さ	口径	底径				
13P 1	土壘	セラワケ	口縁-側溝片	-	-	- 良	内外褐紅色	雲母、長石、砂粒	クロロナデ。小型

第3節 02調査区遺構概要(第17図・図版3.4)

調査の結果、ピット91基、01井戸、01入口を検出した(遺構名は10番: 第7図参照)。遺構確認面について、遺構廃絶後の整地層が20~30cmと厚く困難を極めた。整地層中の遺物を適宜取り上げながら、人力、重機を併用して掘り下げる。層位は最終的には、北側及び中央遺構群ではIV層上面、南側遺構群でIII層上面において確認面となった(11番: 基本層序参照)。遺構確認面の標高は、北側で21.4m、中央で21.7m、南側で22.0mと南側に高くなっている(28番: 遺構確認面の高さ参照)。確認面での覆土層については、01入口北側のピット群では暗褐色土に黒色土・ロームブロックを含む一見すると、カクラン土のような土層であった。下げ進むと円形状の平面プランが全体に確認された。中央遺構群西側のL字状段差内(24番: 第24図参照)ではIV層上面の確認面で暗褐色土の覆土堆積が見られ、下げ進むとピット群の平面プランが確認された。

遺構群として種別したのは、北側の01井戸以北では、ほぼ遺構底面がV層(白色粘土層)で井戸を含めて、水に関わる遺構と考えたからである。中央遺構群では、浅いピット群が密集していることから分類した。南側遺構群は掘立柱建物掘り方に想定される深いピット群や楕円形プラン内に複数の掘方が見られたことから、建物エリアと考えた。また54Pについては鍛冶遺構とも考えている。

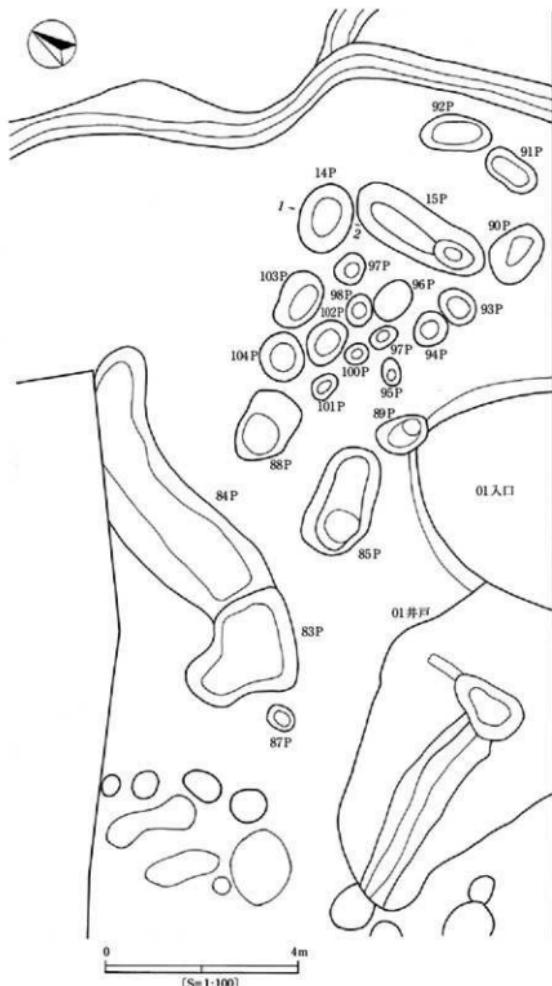


第17図 02調査区遺構配置図

第4節 北側遺構群と出土遺物(第18～23図・図版6～8)

01入口, 01井戸, 83.84.87Pとその北側に連なる三角形状の集合体ピット群からなる。個々の遺構について説明を加える。

83.84Pはほぼ同一遺構として捉えてよい。深さ・覆土も同様で、底面はV層の白色粘土層になる。



第18図 02調査区北側造構群配置図

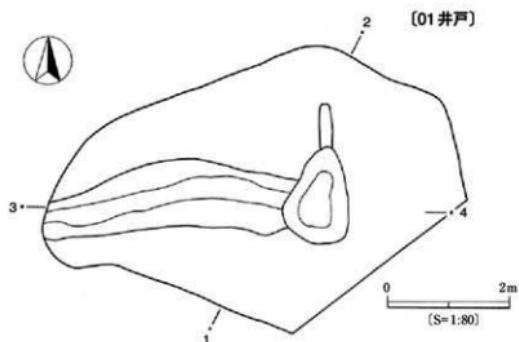
遺物もまとめて出土した。

01入口は一段高い台状で、南東の土壠と01土壠の中間に位置し、出入り口に該当することから命名した。台部は半円形で調査区外に及ぶ。下位の遺構確認面と0.4～0.5mの段差があり、台部を意図した削り残しと考えられる。

01井戸は、01入口と共にした遺構で、重複はない。計画的配置と想定される。方位はほぼ東西方向である。平面形は壁の立ち上がりから想定すると隅丸三角形で、長軸7.1m×短軸4.32m×深さ2.29mとなっている。覆土はロームブロック混入の褐色土ないし暗褐色土で、人為的埋土である。遺構掘り下げ時には、底面から湧水していたが、調査時が夏場だったこともあり、その後枯水した。汲み水口は西方向にスロープが見られるほか、底面から北方位に幅20cmの壁の掘り込みが確認されたことから、井戸ないし貯水施設としての機能が想定される。

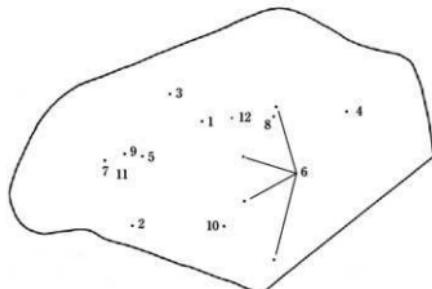
三角形状ピット群は、01入口北側に接し、ピット15基からなる。東西方位で88Pを頂点とし、15Pを基部としている。掘り下げの際は、当初14P.15Pと88Pは確認されたが、更に掘り下げた結果、円形・梢円形態のピットが検出された。これらのピットは、緩やかな三角形の凹み内に作

られる。深さは梢円形態の14.15.88.102.103.104Pと円形でやや大振りな93.94Pでは24～50cmと深く、円形で小振りな95.97.98.100.101Pでは10cm程度と浅い。これらのピット群はIV層～V層を底面としており、水を貯める事は可能である以外は、目的は不明である。

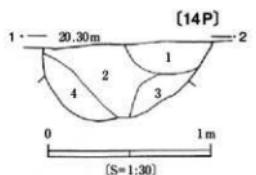


3 —— 21.70m
VII

4 01井戸土層説明
1:暗褐色土 黒色土に2~3cmドロームブロック混入。
2:褐色土 ローム土少量含む。黒色土含む。
3:褐色土 5~10cmドロームブロック混入。
4:暗褐色土 2層類似。黒色土や多い。
5:褐色土 黒色土・5~15cmドロームブロック混合土。
6:暗褐色土 2層類似。ロームブロック主体。
1~2cmドロームブロック・黒色土混合層。



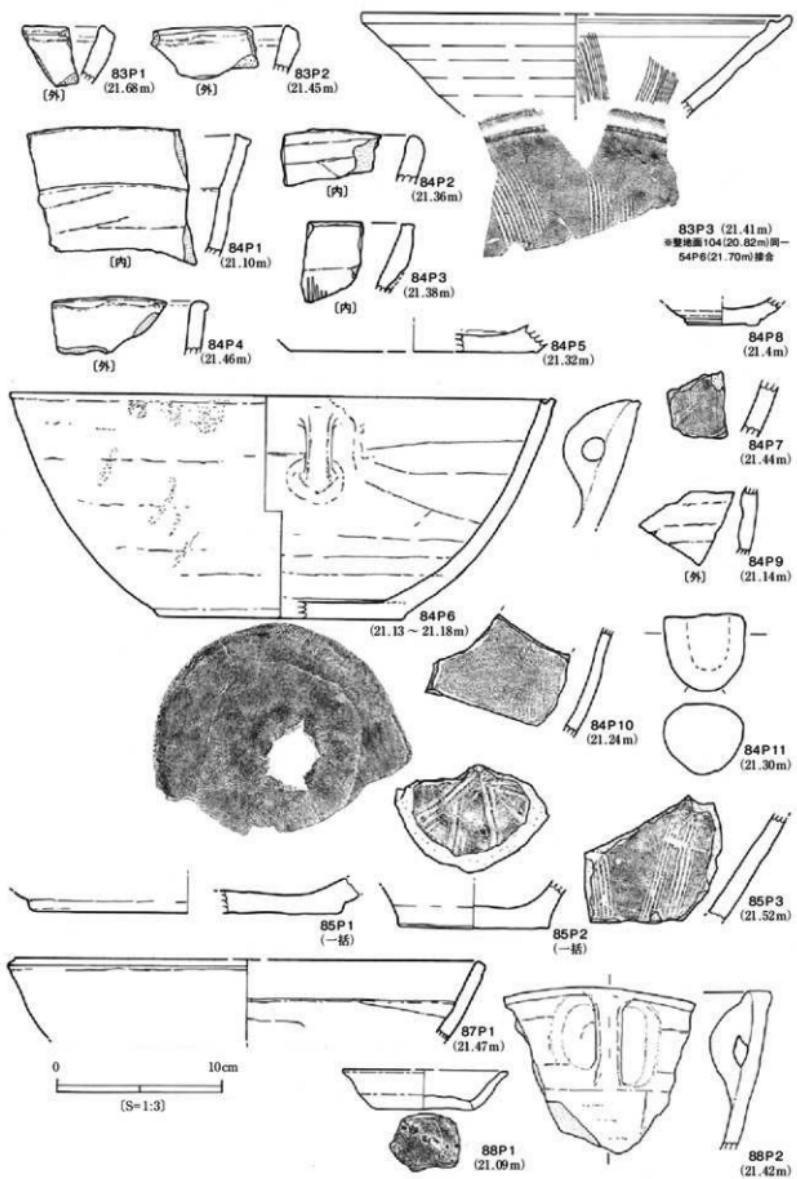
第19図 01井戸遺構実測図



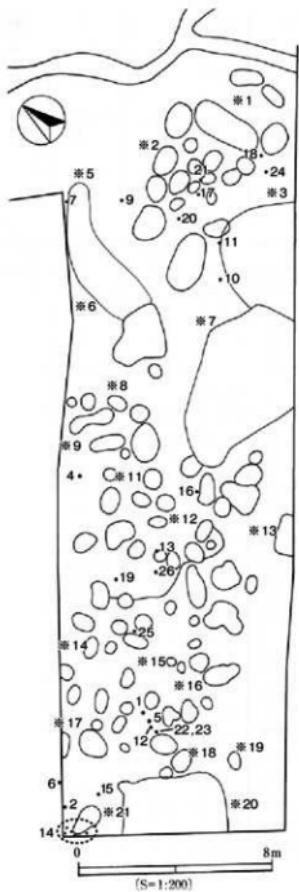
14P土層説明
1:暗褐色土 ローム粒・黒色土混合層。
ややはそぞ。
2:暗褐色土 1層類似。黒色土の混入多い。
3:黒褐色土 黒色粘土、黒色土混合層。
4:褐色土 黒色粘土、白色粘土混合層。

第20図 14P土層断面図

遺物は、01井戸覆土中から深型の内耳土鍋、瀬戸鉢目付大皿、常滑窯・片口鉢等で、時期は15世紀代～16世紀初頭である。全てが埋戻し土中からの出土である。15Pからは大型の砥石が発見された。83.84Pでは、83P3の瀬戸鉢目付が01井戸覆土中及び南側遺構群中の54P覆土中の他遺構間での接合であることから、遺構の同一時期設定が可能である。84P6の内耳土鍋は遺構内からつぶれた状態で出土し、底面中央に焼成後の穿孔が見られる。遺構廃絶との関連性も考慮される。90P1の青磁盤は土壘2T中と90Pから1m離れた整地土層下部と離れた地点からの接合である。瀬戸鉢目付と青磁盤は、ともに15世紀代の所産とされる。このことから、遺構は15世紀代～16世紀初頭に位置付けされよう。



第22図 北側造構群出土遺物(2)



第30図 整地面No. 遺物分布図

遺構確認面の高さ(単位:m)

* 1	21.222	* 11	21.527
* 2	21.133	* 12	21.724
* 3	21.434	* 13	21.83
* 4	21.448	* 14	21.99
* 5	21.123	* 15	21.911
* 6	21.253	* 16	21.932
* 7	21.285	* 17	22.017
* 8	21.472	* 18	21.99
* 9	21.558	* 19	22.082
* 10	21.723	* 20	22.084
		* 21	22.078

生活痕跡と想定されよう。

中央では4のカワラケが20cm高い。3瀬戸端反皿は10cm高い。16瀬戸茶入れはほぼ確認面である。瀬戸美濃産陶器の端反皿の年代観は16世紀前半である。

南側では1.2のカワラケが0~19cm高い。5.6の内耳土鍋は7~15cm高く、12.14の瀬戸端反皿、縁軸小皿は6~8cm高い。15の瀬戸丸皿は11cm高い。その他の遺物では、22.23の銭貨1/4片が2点同位置から出土している。高さはほぼ確認面である。25の火打金も確認面からの出土である。瀬戸美濃産陶器からの年代観は16世紀初頭~16世紀前半となる。

一括遺物では、1のカワラケは大型品となる。その他の遺物として、磨り石・火打石・鏃(ハバキ)が南側遺構群エリアから出土した。

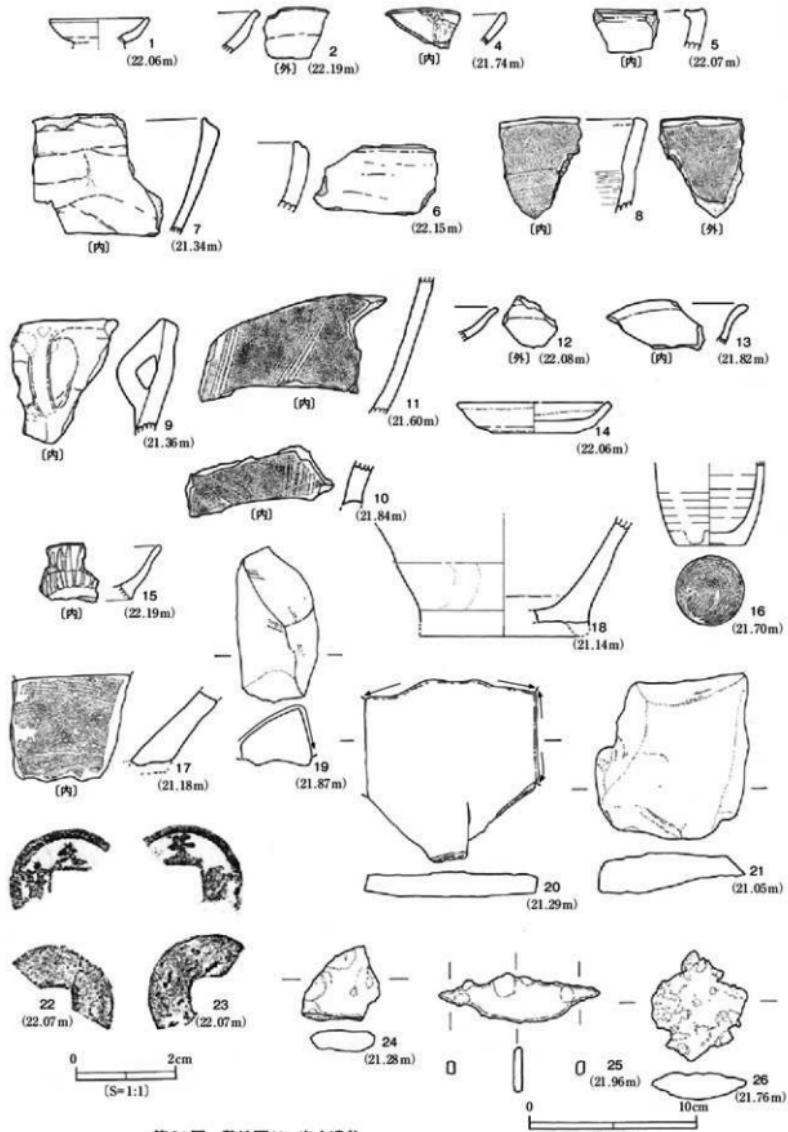
結果として、遺構群を埋めた整地層内の遺物と遺構出土の遺物には明確な時期差が認められないことから、屋敷の造営から廃絶は短期間であったと想定される。

第8節 排土・確認調査時出土遺物(第33.34図 図版10)

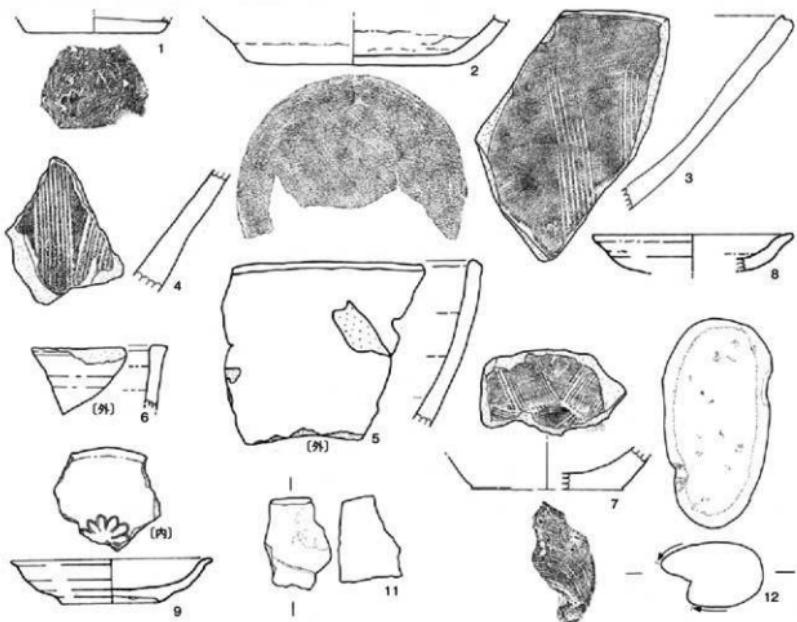
排土遺物12点、確認調査時遺物を15点図示した。

排土遺物は、遺構内・整地層内の構成を示すもので、図示した遺物は、時期を含めてこれまでと同様の内容である。特殊な遺物では、断定はできないものの火鉢が出土した。屋敷内での上層階級が使用したと想定される。

確認調査時遺物は、掘込型屋敷内の未調査域についての土地利用の想定を可能とするものである。確認調査知見では、地下式坑・掘立柱建物跡が本調査範囲外で検出された(47): 確認調査遺構確認状況図参照)。今回の本調査範囲内から出土した遺物は、2.8.9.11.12で時期・器種等も同様な状況である。この内、12は生業に関わる遺物として注目されよう。本調査範囲外の内、掘込型屋敷外の出土品として7は江戸時代末期の陶器片で4T出土である。掘込型屋敷内では、1は17T出土、3.4.6.は15T出土、14は13T出土である。4の土製釜は千葉県東部に類例が求められる遺物で、15世紀後半~16世紀前半に比定される。6の瀬戸捕鉢も16世紀初頭の所産である。今回調査区外の掘込型屋敷においても、同時期の遺物が出土していることから、屋敷地の2,000m²程度をまとまりとして考慮して良いだろう。



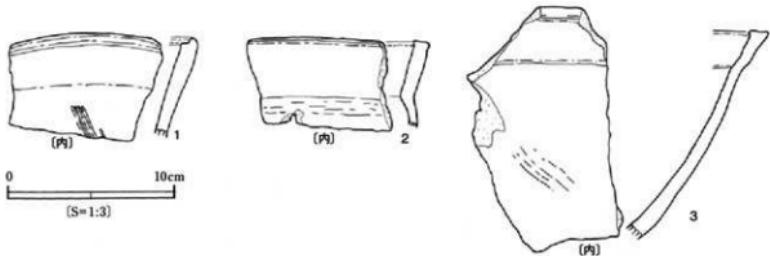
第31図 整地面No.出土遺物



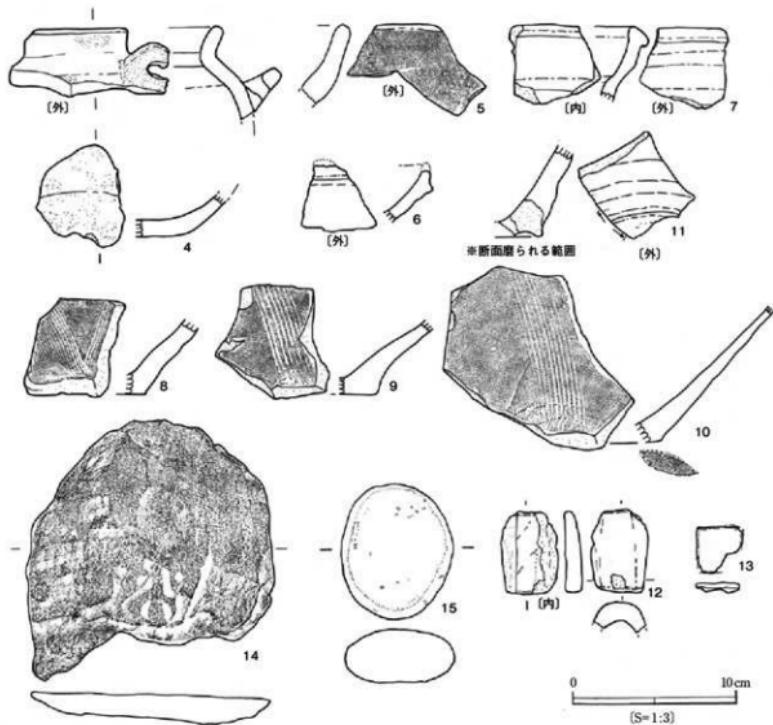
排土遺物観察表

*10は欠番

番号	器種	器形	部位	計測値(cm)			焼成	色調	胎土	調整・文様等
				器高	口径	底径				
1	鉢形器	片	底部1/3	-	-	8.0	良	内外灰白色 赤褐色多量瓦附着	ロクロ形成。	
2	土器	内耳土鍋	底部1/2	達存高27	-	13.4	良	内外青灰色 黒色、灰石	選光火燒成。内外ナガ調整。	
3	土器	土器破片	口縁部1/8	-	-	-	良	外灰褐色 黒色、灰石砂粒	選光火燒成。内外ロコロナガ。縦目8本。	
4	土器	土器破片	胴部下半	-	-	-	良	内外暗褐色 黒色、灰石砂粒	内外ナガ調整。縦目9本。	
5	土器	内耳土鍋	口縁~胴部1/8	-	-	-	良	内外茶褐色 内灰褐色	選光火燒成。内外ロコロナガ調整。外側付着。	
6	土器	火跡少	口縁部片	-	-	-	良	内外青灰色 ち密	瓦質。選光火燒成。ロクロ調整。	
7	土器	壺跡	底部1/4	達存高27	-	9.0	良	内外暗紫青色 (鐵錫)	ロクロ調整。底部右側軸糸切りなし。縦目13本。大空期。16世紀。	
8	土器	縫縫合目	口縁部片	達存高22	12.0	-	良	外灰褐色 内灰青綠色	外側鐵白色。内側青綠色。 やや粗い 外側口唇部下、内側全体下灰褐色。大空期。15末~16初。	
9	土器	壺反目	口縁~底部1/4	25	12.0	6.0	良	内外灰黃白 色(灰褐色)	ロクロナガ。内外面施釉。高台表面中央に董ね縫合目。内面見込み箇所中央に花瓶形有。大空期。16初。	
11	石製品	砾石		幅長54	横長3.9	厚さ3.6	重さ86.5g	砂岩系	二面使用。	
12	石製品	砾石		幅長125	横長6.6	厚さ3.9	重さ353.3g	安山岩	全面において、磨られる。敲打痕跡見られず。	



第33図 排土・確認調査時出土遺物(1)



確認調査時遺物観察表

器種	器形	部位	計測値(cm)			性状	色調	鉄土	調整・文様等
			高さ	口径	底径				
1 土器	土器鉢	口縁部片	-	-	-	良	内外淡褐色	長石、藍母、小石粒	磨化尖底形。内外ナメ。口沿部内側式。底5.5cm以上。DT くすべ地。内面ナメ。口沿部内側突起状。内面剝離な様。 縦下に傳成後の穿孔あり。深型。21T
2 土器	内耳土器	口縁部片	-	-	-	良	内外黒褐色	青母、長石、砂粒	
3 土器	内耳土器	口縁一部	-	-	-	良	内外黒褐色下部有 内側突起	銅青母多含。長石。	磨化尖底形。ロクロ調整。外部分的にハナラズ。内ナメ。L1 内側突起状。内面研一様。底古合。中間型。15T
4 土器	土鍋蓋	口縁部及 伊底部片	-	-	-	良	内外暗褐色-一部 青母	青母、石英、赤色粒 付。内底突出。	外外ロクロナメ。把手部を丸め中央部厚壁。底面や手平底狀。外 部に突出部。15度手-16度手。底部は粗粒状あり。15T
5 土器	土鍋火跡	口縁部片	-	-	-	良	内外黒褐色	青母、長石混入	内外ロクロナメ。外椅子目文。やか丸底状の底部。表採
6 瓢口	瓢跡	口縁部片	-	-	-	良	内外淡褐色	長石、石英	面輪。ロクロ調整。大底。L16-18。15T
7 瓢口	瓢跡	口縁部片	-	-	-	良	内外青褐色	ち密	ロクロ調整。口部下方で底屈する。10世紀か。4T
8 瓢口	瓢跡	底部-側下	-	-	-	良	内外灰褐色	やや粗い	面輪。ロクロ調整。ロクロ目やや厚壁。底12.本。19T
9 瓢口	瓢跡	底部-側下	-	-	-	良	内外黒赤褐色	石英、ち密	面輪。ロクロ調整。ロクロ目やや厚壁。底部回転式切刃離し。 底径9.5cm。22T
10 瓢口	瓢跡	底部-側下	-	-	-	良	内外灰褐色	ち密	面輪。17.7cm周囲。ロクロ目厚壁。底径11.本。表採
11 常滑	片口鉢	底部-側下	-	-	-	良	内外灰褐色	長石、石英、小石粒	ロクロ調整。内面使用による磨り痕認める。側れL1に部分的に 削り痕見られる。片口鉢1個。13世紀。21T
12 乳頭品	環狀土鉢	1/2	幅5.0	通直径3.4	厚さ1.1	重さ 24.5g	内外淡褐色。内 底横突起	青母、長石、砂粒	一部露光尖底形。27T
13 乳頭品	細小丸	1/2	27.4cm	-	厚さ0.25 0.3g	-	-	-	6T
14 乳頭品	板鉢	上部	幅15.1	幅15.1	厚さ1.7	重さ 606.9g	緑色片岩	綠子 キーラ。13T	
15 乳頭品	磨石	完相	幅6.2	幅6.8	厚さ3.2	重さ 239.9g	安山岩	表面無面野される。	表採。

第34図 確認調査時出土遺物(2)

第3章　まとめ

本跡出土の中世遺物と調査地点の性格について

道上 文

米本城跡の本体はⅠ郭～Ⅳ郭からなる(村田1978、遠山他2008)。今回の調査区であるc地点及び過去に調査されたb地点は、郭の外の北側に位置し、郭外と考えられてきた。そしてその性格は城域の内宿(家臣団の居住区)の一部とされてきた。米本城跡の発掘調査の原因となった開発行為において、b地点は字内宿南の加茂文左衛門家の敷地に位置する。c地点はⅣ郭北側にもともとあった溝地状の方形の区画にそのまま相当し、郭外の一部ではあるものの、その性格については明言されてこなかった。今回の発掘調査により、ここは表土から約1.1～2.1mまで掘り下げられたいわゆる掘込型屋敷であることが判明した。

一方、b地点の発掘調査では、加茂文左衛門家の屋敷の周りを囲む低い土塁とその外側に堀状の溝、内側は台地整形区画や土坑などが検出された。堀状の溝や台地整形区画・土坑などは中世の所産、低い土塁は中世の城の土塁を削平して近世に改変したものと考えられる。

このような状況下、c地点の掘込型屋敷は出土遺物から見て、15世紀後半～16世紀前半を主体とするもので、米本城の初源となった屋敷と想定した。一方、b地点は出土遺物からみて、16世紀後葉の米本城に付属する内宿の一部であると考えられる。

本項では、このことを出土した遺物(土器・陶磁器)の分析により証明するとともに、米本城の成立過程を考察することを目的とする。

c地点出土の中世遺物について

c地点では表1のとおり、中世の土器・陶磁器は260点出土した。これまでの米本城跡の調査履歴のなかでは最も遺物の量が多い。保存区を除いた調査面積は865m²であり、面積に対する遺物の出土量は30点/100m²である。

その内訳は表8・グラフ3に示したとおり、内耳土鍋・土器擂鉢が多数を占める。次いで瀬戸美濃窯製品が多く、そのなかでも擂鉢・小皿類が多い。カワラケは33点で全体に占める比率は13%と低い。常滑窯製品も19点で7%と少ないことが特徴である。

貿易陶磁は2点で少ないが、青磁折縁盤1点・白磁外反碗1点(吉岡他2001)が出土している。青磁折縁盤は櫛目文を有し、吉岡編年ではⅣ～2類2B類とされ、Ⅳ期新(1400～1460年)には相当すると考えられる。青磁盤は県内では本佐倉城跡や墨古沢遺跡などで出土が認められるが、類例が少ない資料である。武士の威信財の一種であり、特筆すべき資料である。白磁外反碗は吉岡編年D・A類(森田1982・D群相当)に相当し、15世紀前半頃に比定される。本類の白磁外反碗も県内では数少ない出土資料と考えられる。参考資料として貿易陶磁の豊富な沖縄県に類例を求めた。2点とも吉岡編年では15世紀前半頃に比定されるが、なお検討を要する資料とされている。いずれにせよ県内では稀少な貿易陶磁が出土しているといえよう。

瀬戸・美濃窯製品の時期別変化を見ると(表6・グラフ1)、時期が確定できた資料は古瀬戸後期様式Ⅳ期新段階(以下、後Ⅳ新)～大窯2段階に集中する。口縁部が遺存しない擂鉢の体部・底部片などは後Ⅳ新～大窯段階としつたが、ほぼ後Ⅳ新～大窯1段階に収まるものと推定される。資料全体を見ても後Ⅳ新までのものが多く、大窯段階は少ない印象である。瀬戸・美濃窯製品は15世紀末葉～16世紀前半代が主体である。(なお、後Ⅳ新擂鉢は接合しない破片が4点、4遺構から出土し、これは同一個体として1点と計上した。)

在地系土器は内耳土鍋と土器擂鉢が中世遺物全体の63%を占める。一方、カワラケは13%と少なく、

日常生活感が強いことがわかる。内耳土鍋は深型で瓦質のものが主体であり、瀬戸・美濃後IV新の擂鉢に共伴するものが主である。瀬戸美濃窯製品との共伴の状況及び県内の内耳土鍋編年(築瀬2005)から考えて、内耳土鍋は15世紀後半から16世紀前半までの時期のものである。今回は16世紀後半に比定される焙烙形に近い浅型の内耳土鍋は出土していない。

土器擂鉢はこの深型の内耳土鍋に共伴し、口唇部に1条の沈線が巡るタイプが主体である。土器擂鉢は22点、瀬戸・美濃窯の擂鉢は18点で、土器擂鉢の方が若干上回るが、両者はほぼ拮抗している。同じ機能である常滑窯の片口鉢は5点であるが、13世紀代に比定される高台片口鉢が多く、上記の擂鉢とは時代が異なる。

ほかに土製釜が1点出土している。これは東海系羽釜が多い東京湾岸には少なく、千葉県東部地域にやや多く分布する資料である。八千代市内では下宿東遺跡でも1点出土している。

そのほかに瓦質の土器壺1点、土製火鉢2点、土製香炉1点が出土している。上記の貿易陶磁に加えて火鉢・香炉の所有は階層性の高さを示す遺物である。

上記の遺物出土状況から、c 地点の掘込型屋敷は15世紀後半から16世紀前半にかけて機能し、16世紀後半には廃絶していたと考えられる。

他の遺跡との比較

近年の中世遺跡の研究方法の一つとして、出土した中世土器・陶磁器の破片数を統計処理して、その遺跡の性格を位置づける手法がある。千葉県内の先行研究である築瀬2004、井上2005、柴田2006等の成果を引用・参照しながら、米本城跡についても統計データを他の遺跡と比較することにより、その性格を検討したい。

ひとくちに中世遺跡と言っても、さまざまな性格(階層性等)があるため、それらを網羅する特徴的な県内の遺跡を抽出した。合せて米本城跡から比較的近い距離にある北総地域の遺跡を選択した。なお紙幅の関係で遺跡の所在や性格等及び統計データは表8にまとめた。

抽出した遺跡の性格を簡単に述べると、Aグループは城郭跡で、本佐倉城跡は戦国期の大名である千葉氏の本城、小林城跡は在地領主の城郭の主郭部、北ノ作遺跡は在地領主の小城郭、篠本城跡は土豪層の屋敷が15世紀には一部が城郭化した屋敷群の集合体である。Bグループは地域の土豪層の屋敷跡で、墨古沢遺跡は掘込型屋敷を含む土豪層の屋敷群、東中山台遺跡群(36)は土豪層の掘込型屋敷、中馬場遺跡は水戸街道沿いの集落跡(屋敷・町場)である。

遺跡により調査面積もさまざまであり、また出土点数の多寡もあるが、ここでは遺物の組成に注目する。グラフ3に示したとおり、Aグループはカワラケの割合が卓越する。そのなかで、篠本城跡のみカワラケの割合が低く、土器類においては内耳土鍋の割合が高い。また北ノ作遺跡はカワラケの割合が高いものの、内耳土鍋と拮抗している。Bグループは内耳土鍋の割合が高い傾向が明らかで、土器擂鉢と合せると40%を超えている。カワラケの用途は儀式・儀礼用が主であり、階層性の高さの指標とされている。一方、内耳土鍋・土器擂鉢は日常生活感の強さを示し、土豪層以下の居住地に多い傾向がある。

これを米本城跡 c 地点と比較すると、本地点は内耳土鍋の割合が高く、カワラケの比率が低く、B グループと組成が類似している。すなわち本地点は米本城という城郭の中にあって、土豪層の掘込型屋敷や集落跡の屋敷群と類似した遺物組成といえる。この遺物組成は、本地点が掘込型屋敷の構造を有することと、整合性のある現象である。発掘調査前は城郭の郭外の一部と考えられていたが、本地点は遺物の時期から考えて15世紀後半から16世紀前半を主体とする掘込型屋敷であり、城郭に先行する屋敷と考えられるのである。

b 地点について

では令和元年度に発掘調査された北側エリアの b 地点はどうであろうか。比較のために遺物の集計を再度行った(表3)。b 地点は調査面積が500m²、中世の出土遺物は106点で、21点/100m²と少ない。一方、近世の遺物は90点ある。c 地点(865m²)は、中世遺物は260点(30点/100m²)と多いことがわかるが、近世の遺物は7点であり、中世に比べると非常に少なく、b 地点とは対照的である。b 地点の瀬戸美濃窯製品(表7・グラフ2)は16点と少量であるが、その時期は古瀬戸後期から登窯8小期にいたる。また内耳土鍋は浅型の焰烙形に近いものが主体である。貿易陶磁は2点だが、16世紀末の漳州窯系染付碗及び景德镇窯系染付碗が出土しており、日常生活感が強いなかにも稀少な貿易陶磁を所有している階層であることを示唆する。

以上、b 地点は16世紀後葉を主体としてその後の近世も存続しているエリアであり、16世紀前半で廃絶した c 地点とは対照的である。b 地点が内宿の一部であることが遺物組成からも首肯される。

まとめ

c 地点は、遺構の状態から見て掘込型屋敷の形状を成し、その時期は15世紀後半～16世紀前半にかけて機能し、廃絶後は埋没して塹地状を呈していたと考えられる。掘込型屋敷は北総地域で検出される特徴的な屋敷の形態であり、台地の先端ではなく基部に位置し、単独で存在する場合は15世紀後半から機能し、16世紀初頭から前半には廃絶していることが知られ、所有者の階層は土豪層と考えられている(篠瀬2001)。また、先にも見た墨古沢跡のように掘込型屋敷を含む屋敷群を形成する場合もある。c 地点の出土遺物は貿易陶磁の威信財を有する側面もありながら、内耳土鍋などが多く日常生活感の強いことから、その所有者の階層は土豪層とみられる。ここまで篠瀬2001に示される掘込型屋敷とよく類似しているが、c 地点の場合は単独の屋敷ではなく、米本城跡の一部に位置していることが異なる。

では米本城跡全体と c 地点の関係はどのようにとらえられるであろうか。米本城跡は残念ながら I 郭・II 郭がほぼ削平されているが、I 郭～IV 郭及び内宿を含むエリアは村上氏が支配した時期である16世紀末の城郭の最終的な姿であろう(遠山他2008、外山2022)。このなかでIII郭は楔形虎口を有するものの、方形の土壘に囲まれていることから、当初は古い屋敷として c 地点の屋敷と共に存していた可能性も考えられるが、未調査である。

現時点で考えられる米本城の構築順序は、まず地元の土豪層によって台地の基部に掘込型屋敷が15世紀後半に構築され、16世紀前半にはその使命を終え廃絶するが、その後、16世紀後半には台地の先端に向かって拡張する形で造成工事が行われ、本格的な城郭が構築されたと考えられる。城郭の規模から考えて支配者は土豪層よりも上位の領主層であると推測される。そして16世紀後葉には本地域へ進出した村上氏により(外山2022)、内宿を有する大型城郭へと発展したものと考えられる。

掘込型屋敷を築いた土豪層が誰なのか、不明であるが、北側に隣接する長福寺には板碑が多数保存されていて、掘込型屋敷の時期と一致する15世紀後葉～16世紀前葉の板碑が15基もある(村田1991)。この板碑群は戦国時代の幕明けの時期に供養された人々と土豪層との関係を想起させる。

この掘込型屋敷に居住した土豪層が領主の権力下に取り込まれ、内宿などの城下集落に居住域を移したという方向性を見て取ることもできよう。

本稿を記するにあたり、遠山成一氏、外山信司氏からご教示を頂いた。記して感謝いたします。

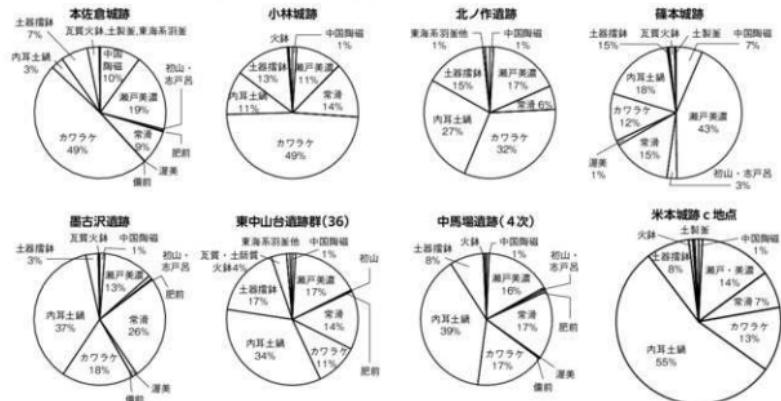
表8 他の遺跡と米本城跡c地点の遺物組成比較(中世・一部は17c前半含む)

遺跡名	本佐倉城跡	小林城跡	北ノ作道路	羅本城跡	墨古沢遺跡	東中山台遺跡群 (36)	中馬場遺跡 (4次)	米本城跡 c地点
所在地	佐倉市・酒ヶ井町	印西市	四街道市	横芝光町	酒ヶ井町	船橋市	柏市	八千代市
調査面積	12,853m ² (トレシ+I~Ⅲ羽とⅣ羽の一部を本調査)	主郭部 3500m ²	4000m ²	29,300m ²	27,342/38,742m ²	2,505m ²	38,287m ²	865m ²
性格	千葉氏の本城	在地領主の城郭の主郭部	在地領主の城郭の主郭部	亂路・城跡 土器窯型灰瓦含む 豪層の城郭化した築造跡	土器窯型灰瓦含む 土器層屋敷群(村落跡)	土豪層の掘込型 窓敷	集落跡(屋敷・町場)	城郭の一部・掘込型窓敷
時期	文永の戦い~1617 15c後半~16c代	15c~16c代	13c~16c前半	12c後半~近世	15c後半~16c 末	12c~近世	15c後半~16c 前半	15c後半~16c 前半
中国陶磁	397	8	5	72	52	4	21	2
瀬戸美濃	754(鑑鉢 269)	89(鑑鉢 22)	93(鑑鉢 31)	480(鑑鉢 31)	524(鑑鉢 71)	84(鑑鉢 45)	525(鑑鉢 99)	37(鑑鉢 12)
初山・赤戸呂	18	0	0	27(掘鉢 10)	39(掘鉢 7)	1	17(掘鉢 9)	0
肥前	7	0	0	0	10	1	18	0
常滑	333片(片口鉢 12)	107	31	161	1098	72	539	19
深妻	1	0	0	13	50	0	9	0
南蛮	2(壺鉢)	0	0	0	2	0	1	0
カワラケ	因44カワラケ3)	380(瓶、皿)	171(瓶、皿)	130	751	53	545	33
内耳土鍋	123	84	143	200	1582	172	1248	143
土器焼付	26(片口鉢 77含む)	105	81	4	129	87	267	22
瓦質火鉢	115	3	0	2	5	19	3	2
土釜(窯形)	4	0	0	15	0	0	0	1
東海系羽柴他	6	0	3	0	0	4	0	0
その他の土器	0	7	6	3	12	3	17	2
合計	3960	783	530	1108	4254	500	3215	261
点数/100ml	30/100ml	22/100ml	13/100ml	37/100ml	16/100ml	20/100ml	8/100ml	30/100ml
文献	1~2	3~4	4~5	6	7	8	9~10	
備考	瀬戸美濃は大室 瀬戸美濃は大室	瀬戸美濃は大室 瀬戸美濃は大室	瀬戸美濃は大室 瀬戸美濃は大室	瀬戸美濃は大室 瀬戸美濃は大室	瀬戸美濃は大室 瀬戸美濃は大室	瀬戸美濃は大室 瀬戸美濃は大室	瀬戸美濃は大室 瀬戸美濃は大室	瀬戸美濃は大室 瀬戸美濃は大室

文献

1. 本内達彦1995「本佐倉城跡発掘調査報告書」財团法人文化財センター
 2. 井上哲郎2009「酒ヶ井町・佐倉市本佐倉城跡の陶磁器類 - 戰国千葉氏本城の組成 -」『房総中近世考古』第3号 房総中近世考古学研究会
 3. 井上哲郎1994「印西市小林城跡 附千葉文化財センター
 4. 井上哲郎2005「南関東における戦国期城郭」『鎌倉と中世の東国』千葉城郭研究会編 高志書院 千葉県文化財センター
 5. 井上哲郎1998「鹿島周辺地域における戦国期城郭の二形態 - 四街道市北ノ作道路の調査から -」『研究発表誌』53号 千葉県立歴史博物館
 6. 道澤 明2000『鎌本城跡・城山遺跡』JR東日本文化財センター
 7. 榎田龍司2006『東関東自動車道木戸橋跡』JR東日本文化財調査報告書3 - 墨古沢遺跡 - 中世版』(財)千葉県教育振興財團
 8. 道上 文能2007『千葉県船橋市・東中山台遺跡群(36)』船橋市教育委員会
 9. 柏市道路調査会1999『柏市埋蔵文化財調査報告書38』中馬場遺跡(第4次)
 10. 篠塚裕一2003『柏市中馬場遺跡の中世遺物について』『房総中近世考古』第1号 房総中近世考古学研究会
- 注1) 表8は複数の参考文献がある場合、同一遺跡のなかで数量に若干の違いが認められたものがあり、筆者が数値を調整した。本佐倉城跡と中馬場遺跡の遺物は、房総中近世考古学研究会の遺物調査に筆者も参加して実見している。

グラフ3 米本城跡c地点と他の遺跡の遺物組成比較



図版1遺構[土塁.1T～3T調査]



土塁全景



土塁中央全景



土塁西侧全景



1T 土塁中央掘り下げ状況



2T 土塁中央掘り下げ状況



3T 土塁西侧掘り下げ状況



1T.2T.3T 掘り下げ状況



1T 土層断面

図版2 造模[1T～3T調査.04M]



2T 土層断面



3T 挖り下げ状況



3T 完掘状況



土壘下完掘状況



3T 土層断面



01 調査区 13P 全景



04M 遺物出土状況



04M 全景

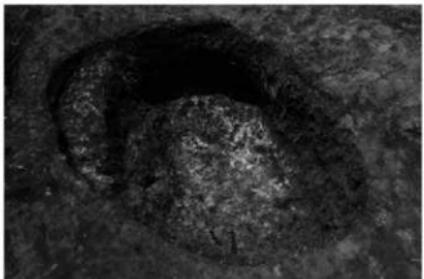
図版3 造構[基本層序. 14P.01 井戸]



04M 遺物出土状況



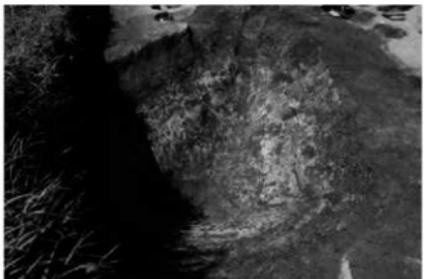
東壁基本層序



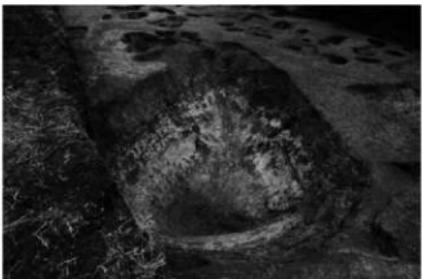
14P 全景



01 井戸土層断面



01 井戸全景 1



01 井戸全景 2

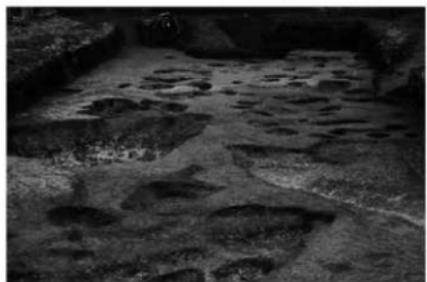


調査区全景作業中



調査区全景

図版4 遺構[調査区全景, 54P, 83P, 84P]



調査区全景



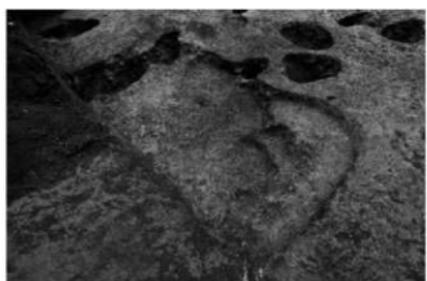
調査区全景(北から)



南側全景



全景(南から)



54P 全景



83・84P 全景

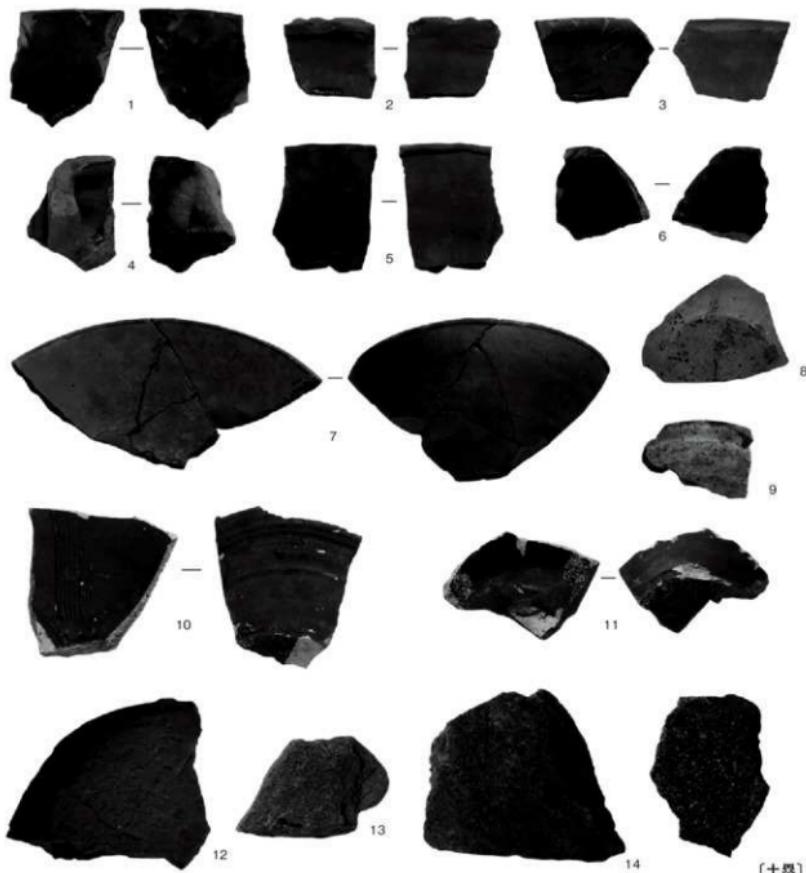


遺跡遠景

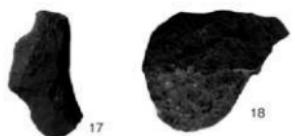


遺跡全景

図版5遺物〔土壙・土壙上〕

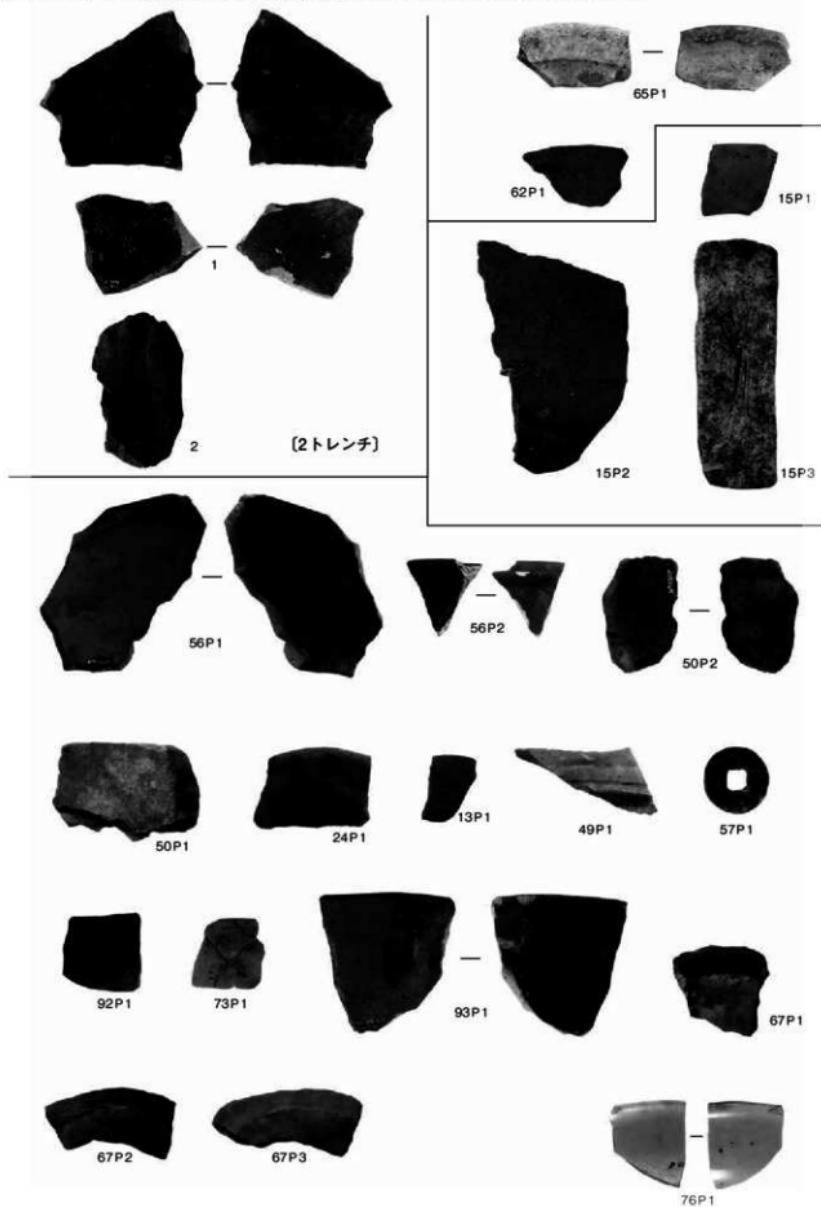


〔土壙〕

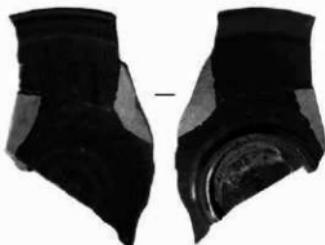
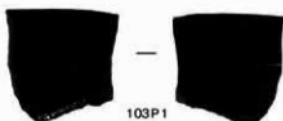


〔土壙上〕

図版6 遺物 [2T.13P.15P.24P.49P.50P.56P.57P.62P.65P.67P.73P.76P.92P.93P]

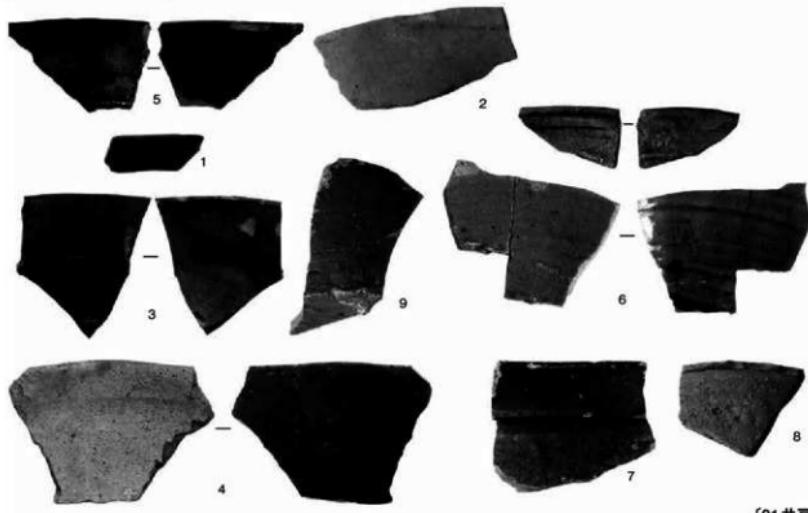
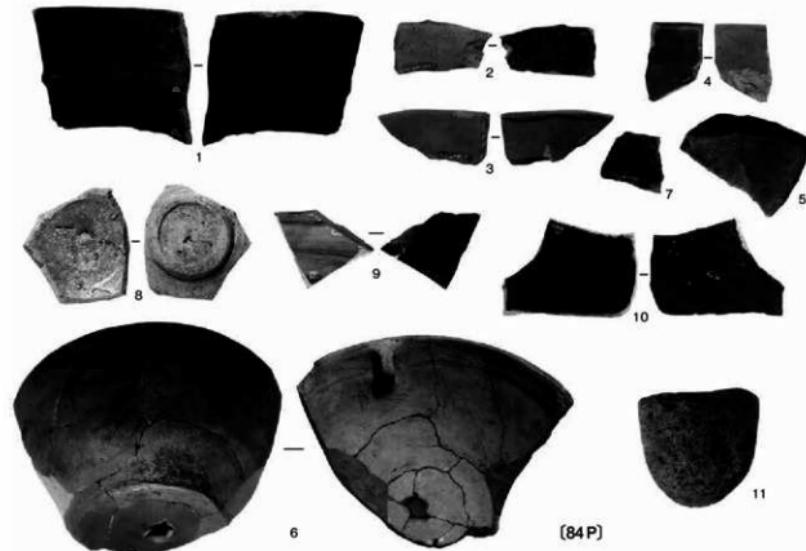


図版7 遺物 [88P, 90P, 103P, 54P, 83P]

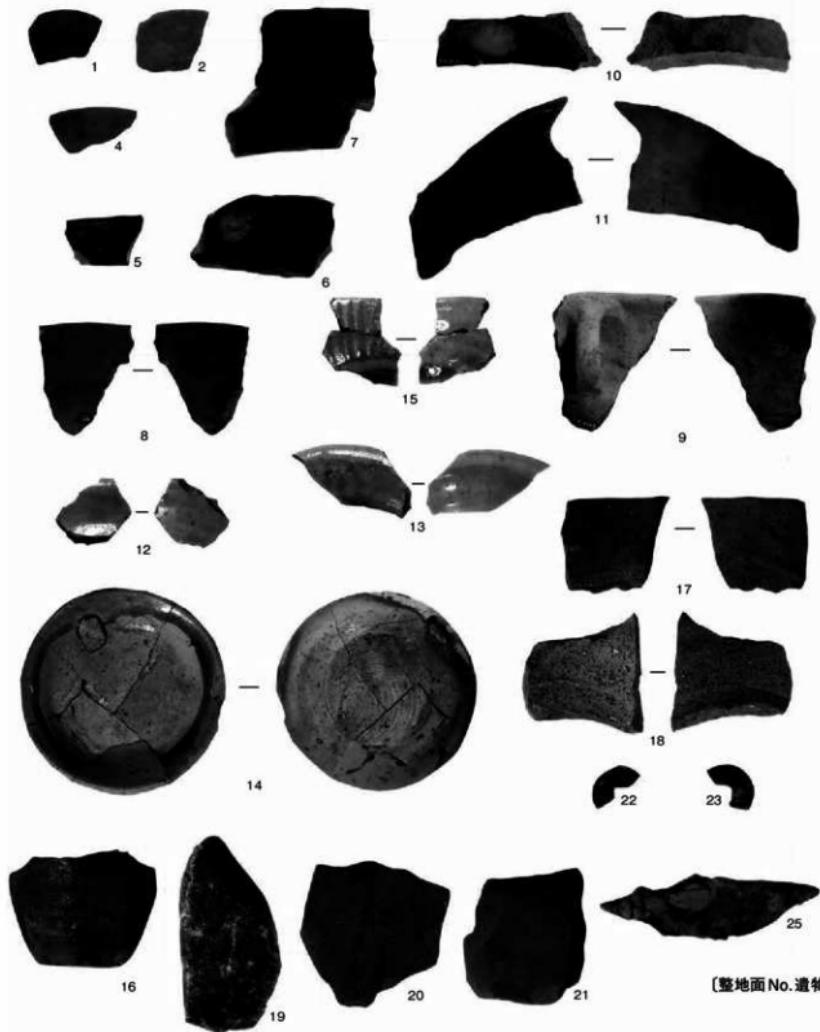


[83P]

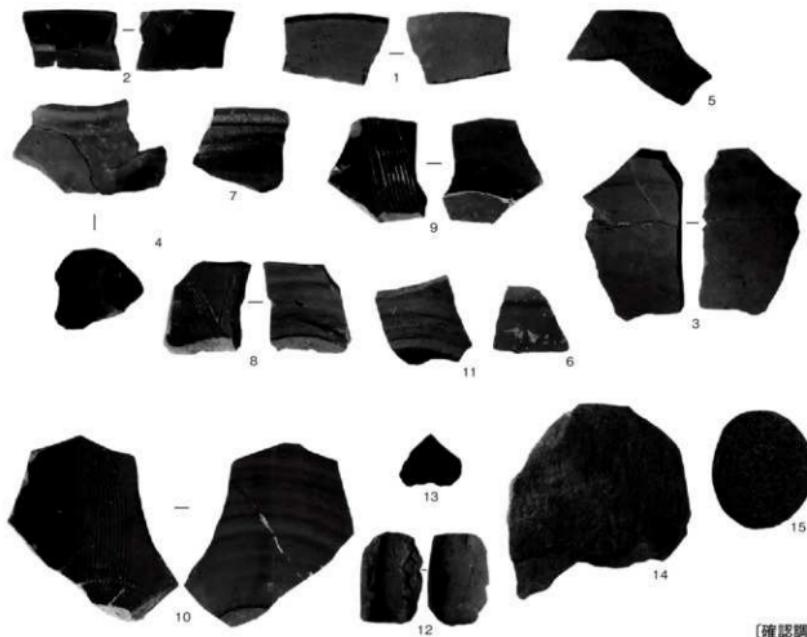
図版8 遺物 [84P.61P.87P.01井戸]



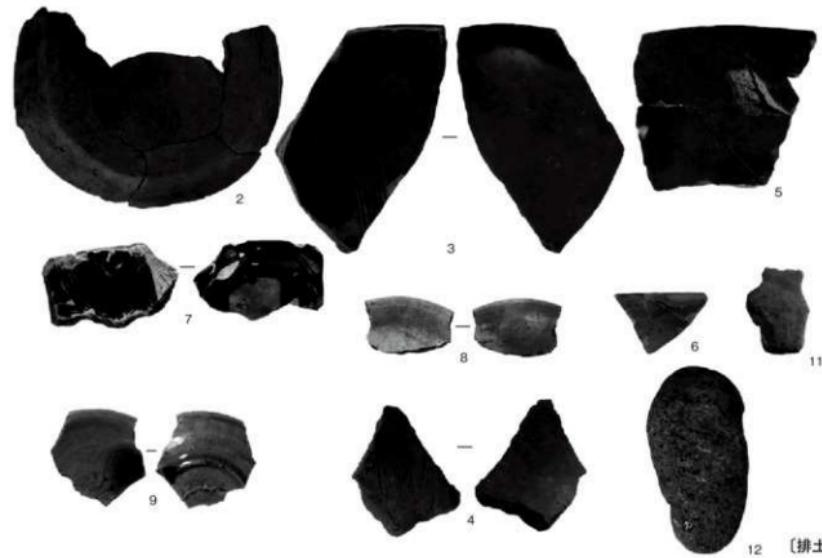
図版9 遺物〔整地面No.遺物.整地面一括〕



図版10 遺物〔確認調査・排土〕



[確認調査]



[排土]

参考文献

- | | |
|----------------|--|
| 浅野晴樹 | 2005 「戦国期城館の年代観」『戦国の城』高志書院 |
| 井上哲朗 | 2005 「南関東における城館跡出土陶磁器－その傾向と歴史的背景－」『城郭と中世の東国』高志書院 |
| 柴田龍司 | 2006 「東関東自動車道水戸線酒々井PA埋蔵文化財調査報告書3－墨古沢遺跡－中世編」(財)千葉県教育振興財団 第542集 |
| 遠山成一・外山信司・道上 文 | 2008 「第四章 戦国時代」「第七章 市域の中世遺跡」「八千代市の歴史 通史編上」八千代市 |
| 外山信司 | 2022 「米本城城主村上綱清と上総－清宮秀堅「下総旧事」をてがかりに－」『千葉県の文書館』第27号 千葉県文書館 |
| 中井正代 | 1995 「米本城跡」「千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書I－旧下総国地域－」千葉県教育委員会 |
| 水澤幸一 | 2017 「中世後期の青磁盤」「中近世陶磁器の考古学」第五巻 雄山閣 |
| 道上 文 | 2021 「中世のムラ・城をめぐるモノの動き—遺跡からみる北総地域の物流－」令和2年度千葉市・千葉大学公開市民講座 講演録「千葉氏の領域における交通と流通－水と陸でつながる人・モノの中世」千葉市・千葉大学(千葉市立郷土博物館編) |
| 村田一男・安達 新 | 1976 「八千代中世城館址調査報告」八千代市教育委員会 |
| 村田一男 | 1978 「『第三章 中世』『八千代市の歴史』八千代市 |
| 村田一男 | 1991 「第二章 中世」『八千代市の歴史 資料編』八千代市 |
| 森田 憐 | 1982 「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2 |
| 菱瀬裕一 | 2001 「千葉市源町遺跡群－高津辺田遺跡・南屋敷遺跡－」(財)千葉市文化財調査協会 |
| 菱瀬裕一 | 2004 「房総の中世集落」「中世の東国世界2 南関東」高志書院 |
| 菱瀬裕一 | 2005 「3. 千葉 房総における15・16世紀の陶磁器研究」「中世土器・編年研究会記録3 関東、東海における中世土器(煮炊具)の最近における研究成果」文部科学省特定領域研究「中世考古学の総合的研究」 |
| 吉岡康暢・門上秀穂 | 2011 「琉球出土陶磁社会史研究」真陽社 |

報告書抄錄

千葉県八千代市 米本城跡 c 地点
－共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

発行日 令和5年3月30日
編 集 八千代市教育委員会 文化・スポーツ課
〒276-0045 八千代市大和田138-2
TEL 047-483-1151(代表)
発 行 加茂 文雄
印 刷 株式会社総合印刷新報社

